

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第23集

知波田小学校遺跡

湖 西 市

平成23・24年度(国)301号地域自主戦略交付金(交通安全)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター

巻頭図版1



▲の交点が調査区の位置

1. 知波田小学校遺跡 遠景（南西から）

遺跡の西側から浜名湖（松見ヶ浦）を望む



2. 知波田小学校遺跡 全景（北から）

巻頭図版2



知波田小学校遺跡 主な土師器

遺物番号は図版 15 の別図1参照

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第23集

知波田小学校遺跡

湖 西 市

平成23・24年度(国)301号地域自主戦略交付金(交通安全)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター

序

知波田小学校遺跡は、静岡県の最西部の湖西市に位置する遺跡です。遺跡は湖西連峰から浜名湖に向かって熊手状に伸びる尾根の先端に立地し、遺跡からは浜名湖の松見ヶ浦を望むことができます。また、遺跡の南側には多米峠を抜けて三河へと通じる道路があり、遺跡から浜名湖岸を北上・南下すれば本坂道や東海道に至ります。知波田小学校遺跡はこうした陸上交通、海上交通の結節点に位置しています。

調査面積は狭小であったものの、知波田小学校遺跡の調査では、古墳時代前期の竪穴建物5軒や、時期不明ながら掘立柱建物3棟などが確認でき、古墳時代～近世まで続く遺跡であることが確認できました。

古墳時代の遺構は竪穴建物5軒で、隅丸方形の平面に、置石炉を伴うものであることが判明しました。建物内に置石炉を伴う点や土器の特徴から浜名湖北岸の都田川流域（引佐地区）との関連性が窺えます。

奈良時代では、遺構は確認できないものの須恵器が出土しており、集落が存在していた可能性が高いことがわかりました。

平安時代では、緑釉陶器や灰釉陶器が出土しており、近在する山林寺院の大知波峠廃寺との関係する遺跡であった可能性も高く、今後大知波峠廃寺遺跡群の広がりを確認するためには貴重な成果となりました。

中世では、中国大陸から輸入された貿易陶磁（青磁・青白磁）、銅錢のほか古瀬戸（14世紀前半）が確認できるので、近在する向雲寺との関係が窺えることもわかりました。

知波田小学校遺跡はこれまであまり調査が及んでいない地域での発掘調査で、古墳時代～近世に及ぶ遺跡であることが確認できた点、想定された大知波峠廃寺との関係だけではなく、向雲寺との関係、古墳時代の浜名湖西岸ルート・三河へ抜けるルートと知波田小学校遺跡の集落の関係などの重要な情報を確認できた点は本調査の大きな成果といえます。その成果を報告した本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、浜松土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年1月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例　　言

1 本書は、静岡県湖西市大知波字カン崎1184-1・1185-1番地の一部に所在する知波田小学校遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は平成23・24年度（国）301号地域自主戦略交付金（交通安全）事業により静岡県埋蔵文化財センターが記録保存のための本発掘調査を実施した。

3 知波田小学校遺跡の確認調査・現地調査（本調査）及び資料整理（報告書印刷製本・収納作業を含む）の期間は以下のとおりである。

確認調査 平成22年9月14・15日 調査対象面積約55m² 実掘面積12.5m²

（静岡県教育委員会文化財保護課実施）

現地調査 平成23年10月17日～12月8日 調査対象面積約55m² 実掘面積約45m²

資料整理 平成23年12月12日～平成24年3月19日（平成23年度）

平成24年10月3日～平成25年1月31日（平成24年度）

4 調査体制は以下のとおりである。

平成23年度

所長	勝田順也	次長兼総務課長	八木利眞	調査課長	中鉢賢治
主幹兼事業係長	村松弘文	総務係長	瀧みやこ	事業担当	青井拓司
主幹兼調査第1係長	富樫孝志	第1係主査	大谷宏治		
調査第2係長	溝口彰啓	第2係指導主事	池谷則秀	主査	大森信宏

平成24年度

所長	勝田順也	次長兼総務課長	八木利眞	調査課長	中鉢賢治
主幹兼事業係長	前田雅人	総務係長	瀧みやこ		
事業担当	主査 青木修	主任	橋野大輔		
主幹兼調査第1係長	富樫孝志	第1係主査	大谷宏治	第2係主査	大森信宏

5 本書の執筆は池谷則秀、大谷宏治が行った。

池谷則秀 第1章・第3章第1節 大谷宏治 第1章・第3章第1節以外

6 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7 外部委託については下記のとおりである。

知波田小学校遺跡掘削等業務委託 株式会社鈴喜組

知波田小学校遺跡測量等業務委託 株式会社ユニオン

整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ

8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる（五十音順・敬称略）。

湖西市教育委員会 湖西市立知波田小学校 足立順司 井鍋誉之 岩原剛 岡本聰 切池融
後藤建一 佐原哲之 鈴木一有 鈴木光一 鈴木敏則 田村隆太郎 貢元洋

9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡例

- 1 本書で用いる国土座標は世界測地系を使用している。
- 2 本書で使用した遺構の表記は以下のとおりである。

SH 壁穴建物 SB 掘立柱建物 SK 土坑 SP 小穴・柱穴
P 壁穴建物・掘立柱建物の柱穴
- 3 本書で使用した土器・陶磁器・土製品の断面および塗布された釉薬の網掛け表示
須恵器（黒塗） 土師器・土師質土器・土製品（白抜き） 陶磁器（灰色）
- 4 註・参考文献については、第5章末（28頁）にまとめて記入した。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

挿図目次・挿表目次・図版目次

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 調査の方法と経過 2

 第1節 調査の方法 2

 1 現地調査・資料整理の方法 2

 第2節 調査の経過 2

 1 確認調査と現地調査 2 2 資料整理 2

第3章 地理的環境・歴史的環境 3

 第1節 地理的環境 3

 第2節 歴史的環境 3

第4章 調査の成果 5

 第1節 調査成果の概要 5

 1 調査区の位置 5 2 知波田小学校遺跡の調査歴 5

 3 調査成果の概要 8 4 基本土層 8

 第2節 遺構・遺物 9

 1 壓穴建物 9 2 掘立柱建物 15

 3 土 坑 16 4 小 穴 17

 5 小穴および遺構外出土遺物 18 6 遺構・遺物観察表 23

第5章 結 語 26

 1 弥生時代末～古墳時代前期 26 2 奈良・平安時代 26

 3 中 世 27 4 知波田小学校遺跡の動向 27

註・参考文献 28

図版

抄録・奥付

挿 図 目 次

第1図 知波田小学校遺跡の位置	1
第2図 知波田小学校遺跡周辺の遺跡	4
第3図 知波田小学校遺跡 調査区の位置	5
第4図 知波田小学校遺跡 調査区全体図	6
第5図 知波田小学校遺跡 調査区詳細図	7
第6図 知波田小学校遺跡 基本土層図	8
第7図 SH01・03実測図	10
第8図 SH01出土遺物実測図	11
第9図 SH02・04実測図	12
第10図 SH02～04出土遺物実測図	13

第11図 SH05実測図	14
第12図 掘立柱建物実測図	16
第13図 土坑実測図	17
第14図 SK01出土遺物実測図	17
第15図 小穴および遺構外出土遺物実測図①	19
第16図 小穴および遺構外出土遺物実測図②	21
第17図 円環付金具の類例	22

【別図】

1 卷頭図版2・図版9に掲載した遺物番号 … 図版15

挿 表 目 次

第1表 土坑および小穴の概要	23
第2表 土器・陶磁器・土製品観察表	24
第3表 金属製品観察表	25

第4表 石製品観察表	25
第5表 銅錢観察表	25
第6表 中世土器・陶磁器一覧表	27

卷 頭 図 版 ・ 図 版 目 次

【卷頭図版】

- 卷頭図版1 1. 知波田小学校遺跡 遠景（南西から）
2. 知波田小学校遺跡 全景（北から）
卷頭図版2 知波田小学校遺跡 主な土師器

【図版】

- 図版1 1. 知波田小学校遺跡 遠景①（南西から）
2. 知波田小学校遺跡 遠景②（東から）
図版2 知波田小学校遺跡 調査区全景（北から）
図版3 1. 知波田小学校遺跡 調査区北部完掘状況
（北西から）
2. 知波田小学校遺跡 調査区南部完掘状況
（北西から）
図版4 1. SH01 完掘状況（北西から）
2. SH01 遺物出土状況①（北西から）
3. SH01 遺物出土状況②（北から）
図版5 1. SH02 完掘状況（北西から）
2. SH02 遺物出土状況①（北西から）
3. SH02 遺物出土状況②（北西から）
図版6 1. SH04 完掘状況（北西から）
2. SH02 燃土出土状況（西から）

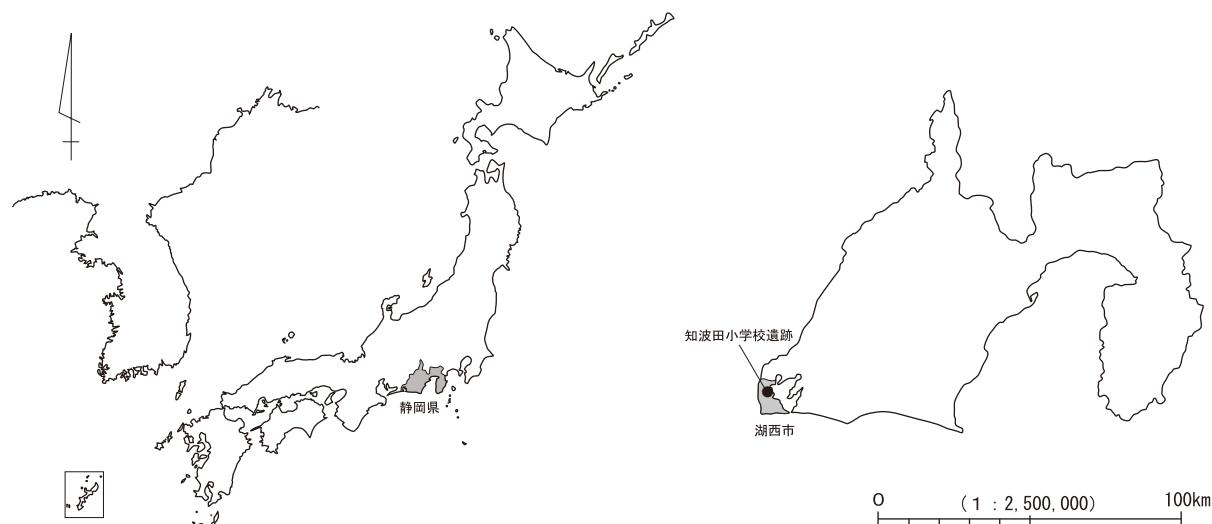
- 図版6 3. SH04 遺物出土状況（北西から）
図版7 1. SH03 完掘状況（北西から）
2. SH03 炉出土状況（西から）
3. SK01 完掘状況（北西から）
図版8 1. 拡張区 完掘状況およびSH05完掘状況
（南東から）
2. SB01-P01 完掘状況（北西から）
3. SB02-P01 完掘状況（北西から）
4. SB02-P02 完掘状況（北西から）
5. SB03-P01 完掘状況（北西から）
図版9 1. SH01出土 土師器（集合）
2. SH02・04出土 土師器（集合）
図版10 SH01・03・04出土 遺物
図版11 SH02・04出土 遺物
図版12 SK01および遺構外出土 遺物①
図版13 小穴および遺構外出土 遺物②
図版14 小穴および遺構外出土 遺物③
図版15 小穴および遺構外出土 遺物④
(別図1 卷頭図版2・図版9に掲載した遺物番号)

第1章 調査に至る経緯

国道301号は、静岡県浜松市を起点とし、静岡県西部の浜名湖西岸から愛知県東部を通過し、愛知県豊田市に至る延長約102kmの主要幹線道路である。国道が市域を南北に貫く浜名湖西岸の静岡県湖西市では、産業・生活両面での主要幹線道路として用いられている。この道路は浜名湖西岸を南北に結ぶ唯一の道路であるため、通勤時間帯には自動車が集中し、大きな渋滞の発生する箇所として知られている。また湖西市周辺には近年、工場や事業所が多数立地しており、また宅地化も進んでいる。そのため国道の交通量は近年、さらに増加してきている。

知波田小学校遺跡の所在する湖西市大知波周辺は、浜名湖沿岸にいわゆる湖西連峰が非常に接近した狭隘な地域であり、国道301号においても急カーブや歩道のない箇所が多い。国道は小中学校の通学路としても利用される地域の生活道でもあり、以前より道路利用者にとって危険な箇所が指摘され、道路拡張工事が行われてきた。また、湖西市立知波田小学校付近は国道と分かれる県道が愛知県方面へと向かう主要道路であるため、渋滞が起こりやすく、交通事情の改善が求められていた。

平成23年度には（国）301号地域自主戦略交付金（交通安全）事業が実施されることとなった。工事実施に際し、工事範囲と知波田小学校遺跡の遺跡範囲とが重複しており、静岡県浜松土木事務所と静岡県教育委員会とが協議をした結果、本調査を実施することが決定した。これを受け、平成23年8月に静岡県浜松土木事務所長より静岡県教育委員会教育長に調査の依頼があり、静岡県埋蔵文化財センターが記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。



第1図 知波田小学校遺跡の位置

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 現地調査・資料整理の方法

現地調査 発掘調査は、静岡県教育委員会が定めた『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき、文化庁監修『発掘調査のてびき』(2010) を参照しながら、実施した。

調査区は国土座標（世界測地系）に基づき、 $5 \times 5\text{ m}$ のグリッドを組む方法を採用した。遺構の掘削は、竪穴建物は4分割、土坑や柱穴・小穴については2分割を原則とし、それぞれの土層帯で土層を観察しながら掘り進める方法を採用した。遺跡の全景写真は大判カメラ（ $4 \times 5\text{ リバーサル・白黒フィルム}$ ）を用いて、それ以外の遺構は中判カメラ（ $6 \times 7\text{ リバーサル・白黒フィルム}$ ）を標準に、小型カメラ（35mmリバーサルフィルム）を補助的に用いて撮影した。

資料整理 発掘調査は、静岡県教育委員会が定めた『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき、文化庁監修『発掘調査のてびき』(2010) を参照しながら、実施した。

第2節 調査の経過

1 確認調査と現地調査

確認調査 確認調査は静岡県教育委員会文化財保護課が平成22年9月14・15日に実施した。調査対象地内に3箇所の試掘溝を設けて、重機で表土等除去を実施後、人力にて遺構・遺物の確認を実施し、すべての試掘溝で遺構・遺物が出土したことから、調査対象範囲全体を現地調査対象範囲とした。

現地調査 現地調査は平成23年10月17日に樹木の伐採を開始し、それが終了した10月19日に安全フェンスの設置を行った。10月24日に重機による表土等除去を実施し、10月24日から人力による包含層掘削を行った。11月10日から遺構検出を行うとともに、検出した遺構から慎重に掘削を行った。掘り上がった遺構から実測図の作成や写真撮影を行い、遺構を完掘した11月30日にラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影（ $6 \times 4.5\text{ リバーサル・白黒フィルム}$ ）を実施した。その後12月1・8日に補足調査および拡張区の調査を行い、発掘作業を終了した。また、12月8日に埋め戻しを行うとともに発掘機材等を撤収し、現地調査を終了した。

2 資料整理

基礎整理 基礎整理作業は、現地調査と並行して土器の洗浄・注記、記録類の図面・写真台帳作成を実施した。

資料整理 資料整理は、現地調査終了後、基礎整理の終了を待って、12月12日から実施した。まず、出土品については、出土遺物の分類・仕分けを行い、遺物の種類ごとに接合を行った。接合終了後、実測・復原・写真撮影を実施し、版組・トレースを行った。記録類については、版組・トレースを行った。これらの作業が終了後、原稿執筆・編集作業を行うとともに、収納作業を実施し、平成23年度の作業を3月19日で終了した。

平成24年度に報告書の校正および印刷製本、金属製品の保存処理を行い、すべての作業を終了した。

第3章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

静岡県湖西市は、愛知県豊橋市と隣接する静岡県の最西端に位置する。その市域は東に浜名湖、南に遠州灘、北西に赤石山系から伸びる弓張山地で囲まれている。湖西市の地形は、北西部に弓張山地、南部には遠州灘に沿って東西に渥美半島まで続く天白原（または天伯原）台地、中央部には浜名湖に続く沖積平野に大別できる。弓張山地は通称「湖西連峰」とも呼ばれ、標高約320～450mの山々が南北に連なり、静岡県と愛知県を隔て主尾根から東西方向に支尾根が伸び、東側の湖西市北部では浜名湖に迫り、一部は浜名湖に突出して半島状の地形を形成している。また、丘陵の間を今川や太田川などが浜名湖に向かって流れ、河口に礫・砂・泥層の沖積平野を形成している。支尾根は河口周辺では緩やかな河岸段丘を形成し、現在では河口の沖積平野とこの段丘上に集落や耕地が広がる。

南部の天白原台地は第四紀洪積世の高位段丘礫質堆積物を基礎とする標高70m程の台地で、北に向かって次第に低くなる逆傾斜の地形である。南は遠州灘に面し、海食崖となる。また中央部の沖積平野は天白原台地や弓張山地から浜名湖に注ぐ河川からの堆積物を基礎とし、標高は0～10m前後である。

知波田小学校遺跡は、湖西市の北部、東海道線鷺津駅より北北西に5.6km、天竜浜名湖鉄道知波田駅から北へ0.5km、弓張山地から続く丘陵状支尾根末端台地上の標高10m前後、今川が形成した沖積平野の北側の丘陵平坦面に位置する。遺跡のある段丘は現在すぐ東を通過する国道301号や天竜浜名湖鉄道によって東西に分断されるが、本来は、遺跡から0.3km東側の松見ヶ浦に向かって突き出る半島状の丘陵まで連続していた。

第2節 歴史的環境

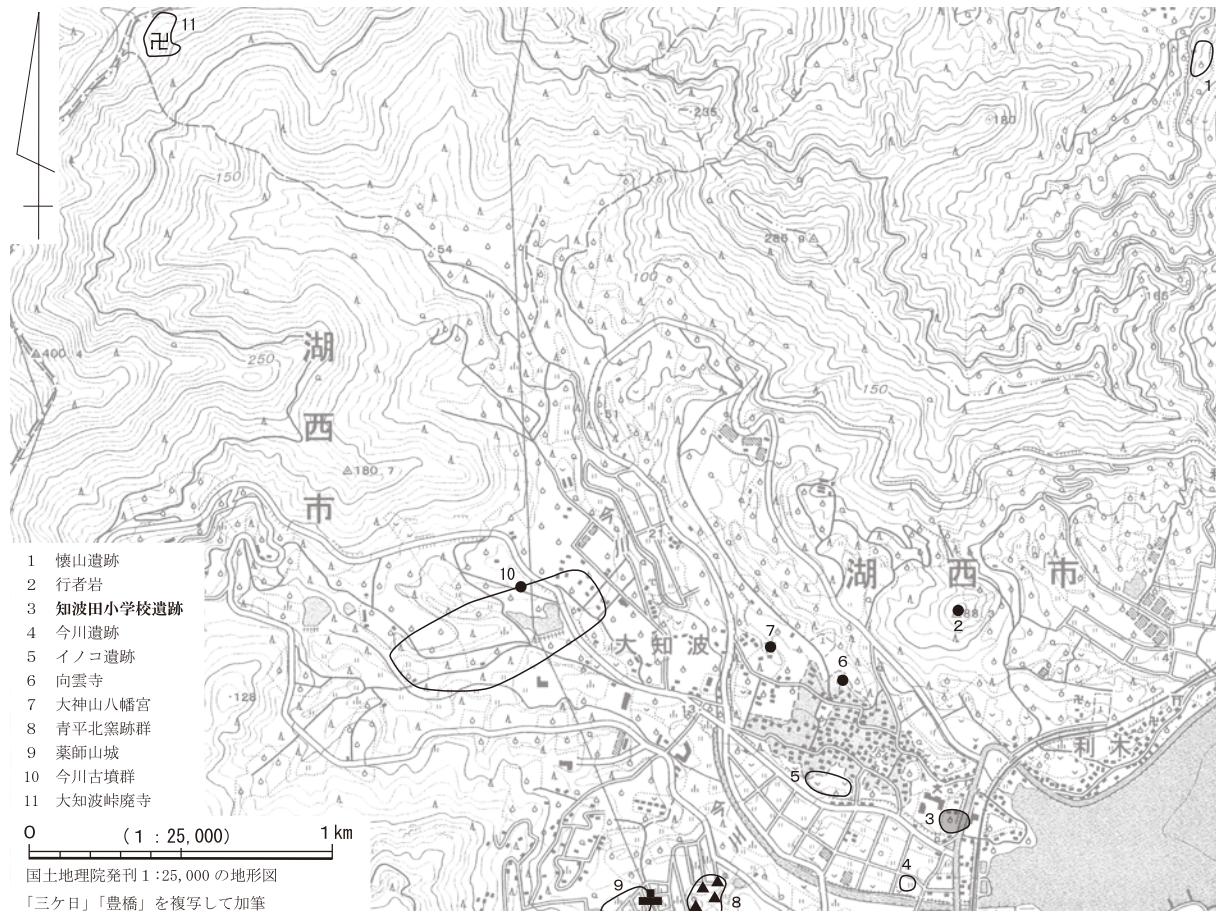
縄文・弥生時代 縄文時代～近世まで連続すると考えられているイノコ遺跡が所在するほか、湖西市新居町の天白遺跡でこの時期の建物や遺物が確認されている。弥生時代では、観音山遺跡や横枕Ⅰ遺跡などで中期～後期の土器棺墓が確認されたほか、湖西運動公園遺跡でも土器が出土している。

古墳・奈良時代 古墳時代前期では、湖西市新居町の天白遺跡で竪穴建物が確認され、土師器高杯・壺などが出土している。浜名湖を挟んだ浜松市側では、この時期の大規模集落である大平遺跡・坊ヶ跡遺跡が確認されており、浜名湖を挟んで同時期の集落が、小尾根先端近くの平坦面に形成されている。

古墳時代中期後半には湖西市域周辺には須恵器窯が導入され、13世紀まで継続する全国でも屈指の大窯業地帯、湖西古窯跡群（二川窯・渥美窯を含む範囲）が形成される。湖西古窯跡群は湖西連峰の先端の丘陵斜面に築窯されており、湖西市、豊橋市、田原市など広域に形成されているが、主に湖西市に須恵器窯、豊橋市に灰釉陶器窯、渥美半島に山茶碗窯が操業された。

また、5世紀代には知波田小学校遺跡の近在に利木古墳や、梅田G1号墳などが築造された。6世紀末から8世紀には確認される数は多くはないものの、神座古墳群、梅田古墳群、横枕古墳群などの横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築かれる。平成23・24年の駒澤大学により、神座古墳群の発掘調査が行われ、6世紀後半に遡る古墳が丘陵尾根上に築造されていることが確認された。

また、湖西運動公園遺跡では奈良時代の竪穴建物数軒が確認されている。



第2図 知波田小学校遺跡周辺の遺跡

平安時代 知波田小学校の所在する尾根は、山林寺院である史跡大知波峠廃寺が位置する。これまでの発掘調査で、平安時代中頃～後期（10～12世紀）にかけての仏教寺院の伽藍を構成する礎石建物（仏堂）、池跡、段状遺構などが確認され、綠釉陶器や灰釉陶器、墨書き土器、鉄製品、木製品など数多くの遺物が出土した。また、湖西連峰は霊山であり、連峰内の諸所には、大知波峠廃寺に関連すると想定される遺跡や寺院などが確認されている。愛知県側（豊橋市）には、普門寺跡、赤岩寺などの諸寺院が所在しており、まさに湖西連峰が信仰の山として位置づけられていたことを物語る（湖西市教委1997）。

中世 知波田小学校遺跡の近くには、向雲寺（時宗）がある。当寺は縁起によれば成和元年（1312）に他阿上人の巡化の際に真言宗から時宗へ改宗したとされ、もとは寺畠または寺坂と呼ばれる丘陵地に所在したと想定されている。この旧所在地「カン寺」では五輪塔や宝篋印塔が出土したといわれており（湖西市教委1997）、知波田小学校遺跡—知波田小学校遺跡が所在する地域は「カン崎」と呼ばれる一からも近いことから、当遺跡で確認された中世の遺物は、この寺院との関係が想定できる。

近世 湖西市内には特別史跡新居関跡が所在するなど古くから水陸の交通の要衝であった。新居関跡は江戸時代前半に元新居地区に設置されたものの、度重なる自然災害の被害を避けるため江戸時代中期に新居地区（現在地）に移され、明治を迎えて廃闢された。これまでの発掘調査で、建物や船着場などが確認されるとともに、平成22・23年度の調査では関の入口にあたる「枡形」を構成する土壙と石垣、柵列などが確認されている。なお、現在の新居関の建物は安政の大地震後再建されたものである。

第4章 調査の成果

第1節 調査成果の概要

1 調査区の位置（第2・3図）

知波田小学校遺跡の今回の発掘調査区（以下、調査区）は、天竜浜名湖鉄道知波田駅の北約500m、国道301号線の多米峠入口交差点北側の丘陵平坦面の東端に立地し、丘陵南側の谷部分とは約5mの高低差がある。調査区の西側には湖西市立知波田小学校が位置し、遺跡はこの敷地内まで広がると想定される。遺跡からは、浜名湖の松見ヶ浦を眺望できる。また、松見ヶ浦の奥部に張り出す尾根上に立地し、多米峠を越えるルートに位置することから、海上交通、陸上交通の要所に位置しているといえる。

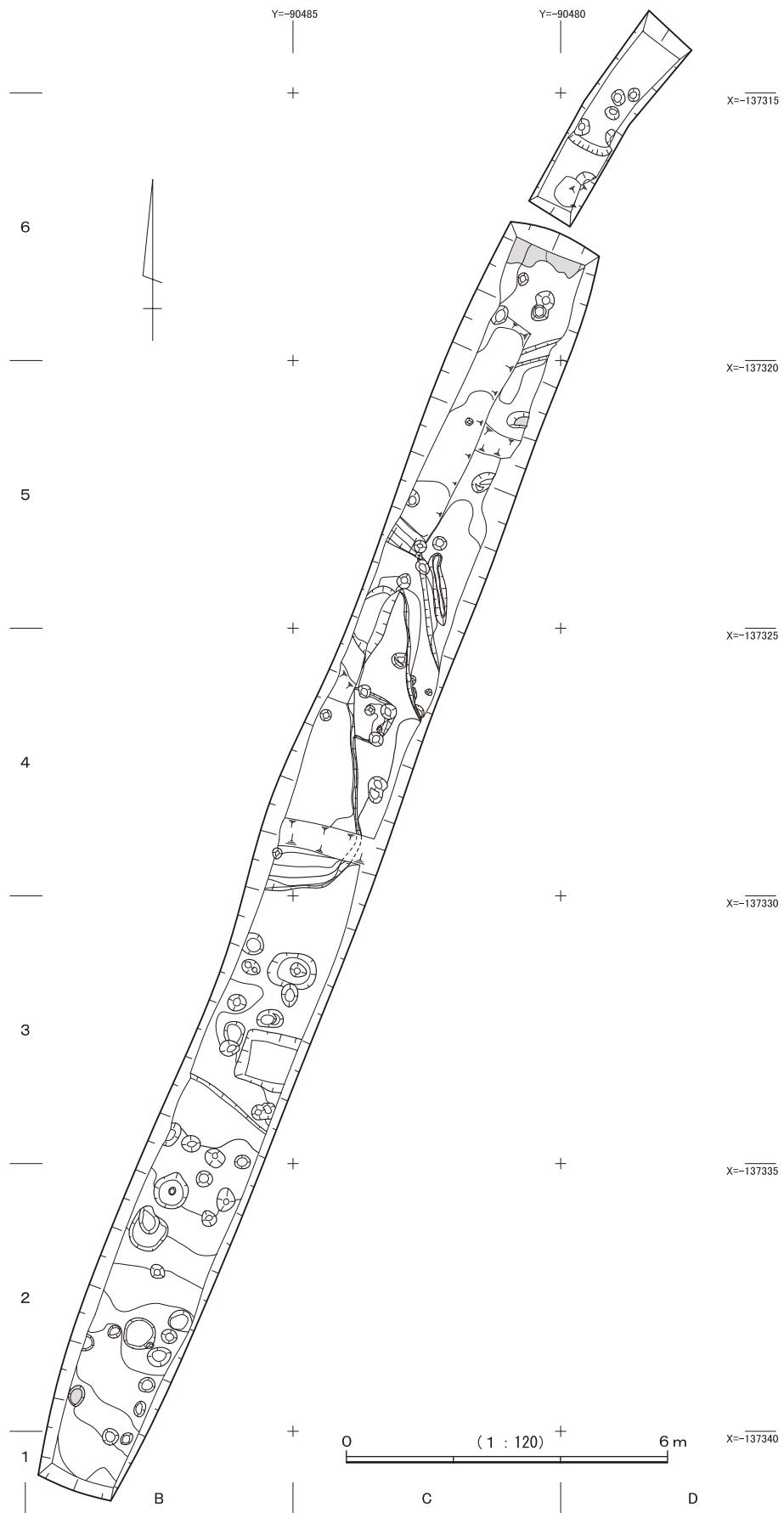
2 知波田小学校遺跡の調査歴

知波田小学校遺跡は、古くから遺跡として周知されていたものの、これまで本格的な調査が行われたことがなかった。これまでに古墳時代、中近世の土器・陶磁器が採集されており、古墳時代から近世に亘る複合遺跡であることが想定されていた（註1、註は28頁参照）。

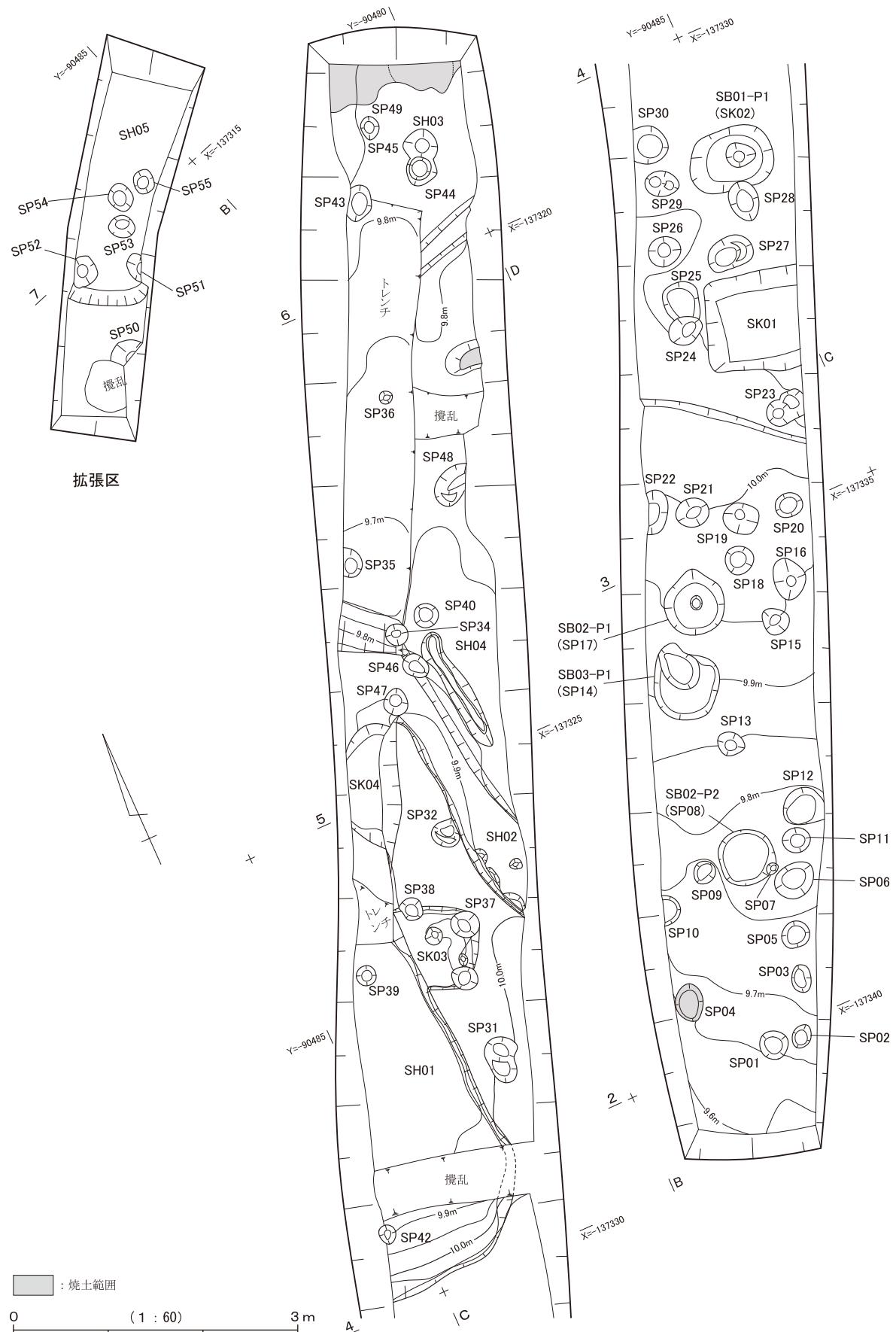
こうした状況の中、今回の調査が第1次調査となり、多くの成果を得ることができた。



第3図 知波田小学校遺跡 調査区の位置



第4図 知波田小学校遺跡 調査区全体図



第5図 知波田小学校遺跡 調査区詳細図

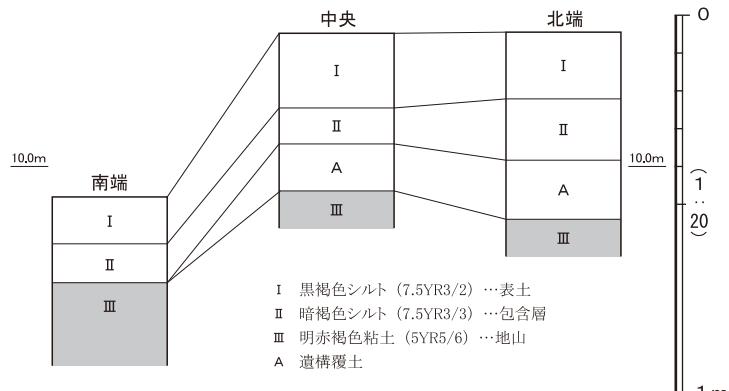
3 調査成果の概要（第4・5図、巻頭図版1・2、図版1～3）

今回の調査では、古墳時代、奈良時代、中世～近世の遺構・遺物が出土した。遺構としては、竪穴建物5軒（以上）、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物3棟（以上）、土坑3基、小穴51基（掘立柱建物の柱穴になったものを除く）、^{どこう}^{しょうけつ}炉の可能性のある焼土を含む土坑1基が出土した。遺物は、土師器（弥生土器）、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、^{せいはくじ}青白磁、^{せいじ}青磁（龍泉窯）、瀬戸美濃（古瀬戸・大窯）、^{せいごうかめ}清郷甕（鍋）、土師質土器（内耳^{なべ}鍋）、^{なべ}渥美、常滑、かわらけ、銅錢、銅製円環付金具、砥石、轆羽口、土製人形が出土した。

4 基本土層（第6図）

知波田小学校遺跡の基本土層は、第6図のように、3層に区分できる。

III層が地山であり、遺構はすべてIII層上面で確認した。奈良時代以降の遺構については、II層中に掘方が存在する可能性が高いが、確認できなかった。



第6図 知波田小学校遺跡 基本土層図

現状では調査区北部から南部に向かって緩やかに傾斜しており、遺跡の標高も南側が低くなっている。

基本土層は以下のとおりである。

- I層 表土
- II層 包含層（弥生時代末～近世）
- III層 地山

なお、地山面は粘性が強い土砂であり、竪穴建物等の床面には、地山の土砂と上位の土砂を混ぜて貼床としていた可能性が高い。

第2節 遺構・遺物

1 竪穴建物

竪穴建物は5軒（以上）確認できる。建物の覆土上層（包含層の可能性が高い）からは須恵器が出土したが、床面から出土した土師器から判断して、SH01～05の5軒は弥生時代末～古墳時代前期に位置づけられる。

(1) 1号竪穴建物（SH01, 第7・8図, 第2表, 卷頭図版2, 図版3・4・9・10）

位置 SH01は、調査区中央、B4・C4グリッドに位置する。SK03と重複関係にあるが、前後関係は不明である。建物の大部分は、調査区外に位置する。

特徴 SH01は隅丸方形の建物で、建物の主軸はN-1°-Wであり、ほぼ真北に主軸を向ける。主柱穴は明確ではないが、SP39やSP42にその可能性があるものの、特定できない。規模は、南北3.75m以上、東西1.75m以上である。床面には貼床が行われていた。

遺物の出土状況 建物中央の東壁近くで、土師器高杯（1）が脚部を下に向けた正置の状態で出土した。また、建物東南隅角部で、土師器壺2点（5・6）が出土した。このほか、土師器高杯（2・3）や甕（4）などが覆土中から出土した。

出土遺物 出土遺物は、土師器高杯（1～3）、壺（5・6）、台付甕（4）である（註2）。

高杯は3点（1～3）図示した。1は杯部に稜線をもつ有稜高杯である。杯部は稜から大きく外反する。脚部はハ字形に垂下するもので、脚端部はやや内湾する。2は小型の高杯の脚基部片である。脚部はハ字形に垂下する。3は高杯の脚部片で、ハ字形に垂下し、端部は外側に開く傾向にある。透孔の上部には二本の直線文（横線文）が施されている。

台付甕（4）は、受口状口縁台付甕で、口縁部外面に斜めの列点文を施す。

壺は2点（5・6）図示した。5は折り返し口縁の壺で、胴部は球胴で、頸部から口縁部に向かって外反し、口縁部は折り返して肥厚させる。6は球胴の壺の胴部片である。2点ともに在地の土器と想定する。

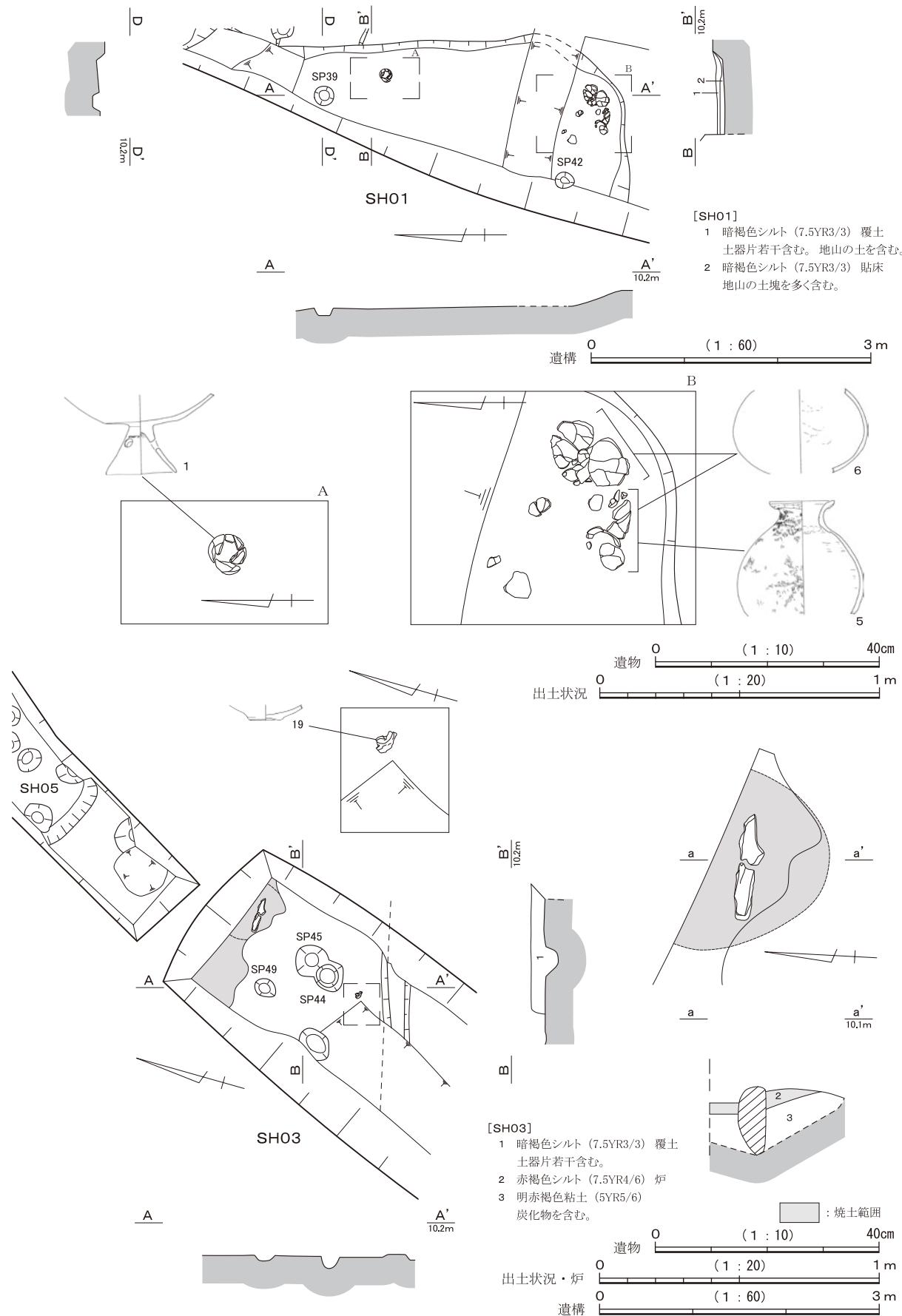
時期 SH01は出土した遺物により、鈴木一有氏による元屋敷土器編年の元屋敷期直前（欠山3式期）～元屋敷I-1～2期（鈴木一2009）、弥生時代末～古墳時代前期初頭（庄内式土器併行期、廻間2式併行期）に位置づけられる可能性が高い。

(2) 3号竪穴建物（SH03, 第7・10図, 第2表, 図版3・7・10）

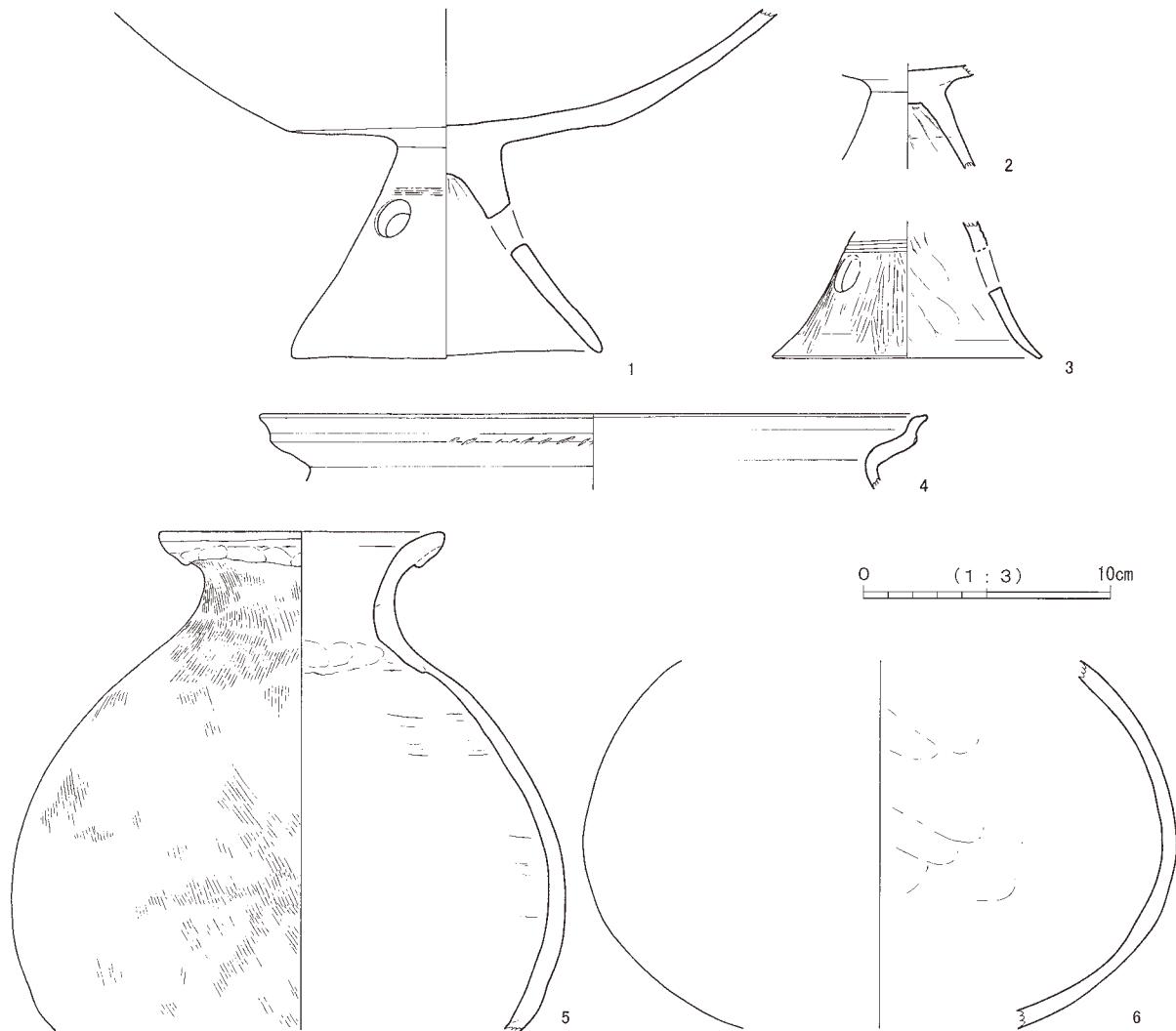
位置 調査区北端、C6・D6グリッドと拡張区に跨る。SH05と重複関係にあり、SH05に破壊されている。したがって、SH03→SH05の順で建設されたことが判明する。

特徴 SH03は炉を持つ建物で、SH04から0.2mと近接する。方形の竪穴建物とすれば、建物の主軸はN-13°-Wであり、SH01同様主軸をほぼ北に向けていたと想定する。南辺のみの確認であるため規模は不明であるが、現状で南北3.5m以上、東西2.4m以上であったことは確実である。

炉は南壁から約1.2m北側で確認した。^{おきいしろ}置石炉である。地山を皿状に掘り込み、その内部に細長い礫を縦位に東西に並べて、その周囲を粘性の強い地山（粘土）を利用して炉床面よりやや高く盛り上げて炉としている。炉の西側も被熱して焼土となっている。炉の範囲はやや不整形な円形で、東西約0.65m、南北0.55m以上、深さ約0.2mである。置石はほぼ東西に向けて小口を合わせて並べられている。使用された石材は2点ともに砂岩で自然礫である。長さ約15、20cmである。



第7図 SH01・03実測図



第8図 SH01出土遺物実測図

遺物出土状況 SH03は、包含層および床面直上で土師器が出土した。小片のものが多く、ある程度形を留める土師器壺（19）は炉の南側から底部を上に向け破片となった状態で出土した。

出土遺物 土師器壺（19）などが出土したが小片であり、19以外は図示できない。

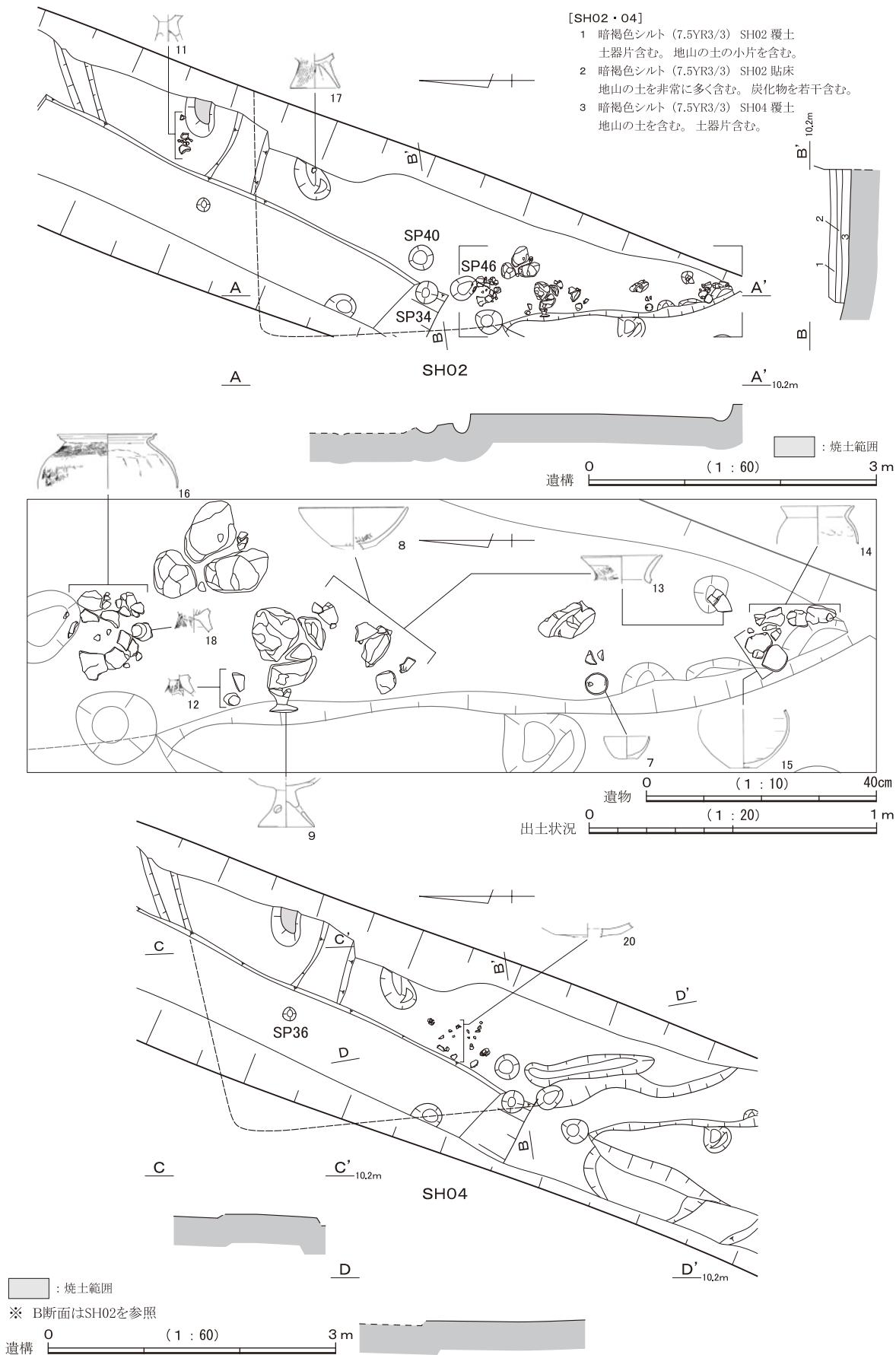
土師器壺（19）は底部片である。底部は上げ底であることから、まず基礎となる円形の輪を造った後その内側を埋めてゆく方式で土器製作が行われたことがわかる。

時期 時期を特定できる土器が出土していないため確定的ではないが、置石炉を伴うことなどからSH01・02などと同時期の古墳時代前期初頭に位置づけられる可能性が高い。

(3) 2号壇穴建物（SH02、第9・10図、第2表、巻頭図版2、図版3・5・6・9・11）

位置 SH02は、調査区のほぼ中央、C 4・5グリッドに位置する。SH04と重複関係にあり、SH04→SH02の順に建設されたことが判明した。

特徴 SH02は、壇穴建物の西辺を確認したものであり、平面形態は不明であるが、南側が緩やかに東側に向かって弧を描くことからSH01同様平面形は隅丸方形であった可能性が高い。残存する西辺により、建物の主軸はN-4°-Wで、ほぼ真北に向ける。



第9図 SH02・04実測図

SH04を覆うように貼床が行われているが、この範囲をもとに建物の北辺がおよそ判明し、第9図にはその範囲を破線で示した。この想定が正しいとすれば、SH02の規模は南北5.0m以上（5.5m以内と想定）、東西2.6m以上である。

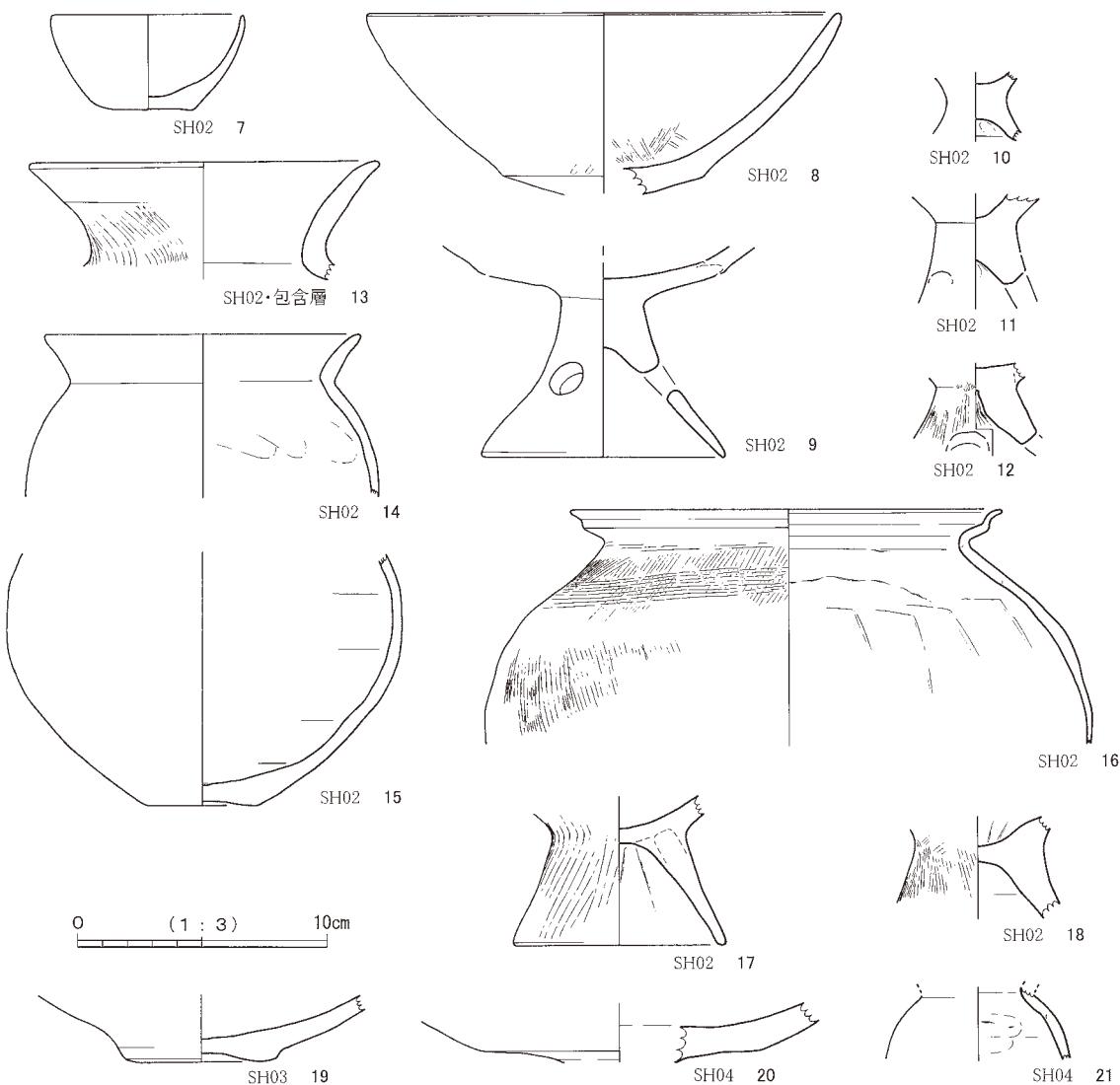
調査区内では炉は確認できない。主柱穴についてはSP34・40・46などが候補になるが不明である。

遺物の出土状況 西壁に沿って床面上で土師器が確認された。中央部付近で台付甕（16・18）が、その南で高杯（9）が横置状態で出土した。その付近で高杯（8・12）が出土した。さらに、そこから0.6m南で小型の鉢（7）、その南0.4~0.8mで壺（15）・甕（14）が出土した。なお、壺（13）は高杯（8）と甕（14）付近から出土したものが接合している。また、SP48から出土した台付甕（17）もSH02に伴う可能性が高い。

なお、建物内には人頭大の石材（角礫、凝灰岩）が6石確認できるが、土師器高杯（9）の脚部がそのうちの1石に載るように出土しており、石材が古墳時代以降に持ち込まれたのではなく、当初からこの位置にあった可能性が高い。これらの石材の機能については不明である。

出土遺物 土師器小型鉢（7）、高杯（8~12）、壺（13・15）、甕（14・16~18）が出土した。

小型鉢（7）は平底で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。高杯（8）は有稜高杯で、口縁部は稜部分から大きく開くが、やや内湾傾向にある。高杯（9）も有稜高杯であり、口縁部は欠損しているが、



第10図 SH02~04出土遺物実測図

8同様大きく開いていた可能性が高い。脚部はハ字形に垂下し、端部はやや内湾傾向を示す。高杯（10～12）は脚基部片である。高杯はいずれも3方向の円形透かしが穿たれている。SH02出土遺物には実測していない高杯片もあり、高杯が5点以上と多いことが特徴である。壺（13）はく字形口縁壺であり、口縁部は頸部から外反して立ち上がる。壺（15）は胴部から底部片である。底部は上げ底で、胴部は球胴である。13とは胎土が異なるため接合しない。甕（14）は胴上部から口縁部の破片である。口縁部はく字形の単純口縁で、頸部から外反して立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。口縁端部に刻みはない。S字状口縁台付甕（16）は、S字甕C類に位置づけられる可能性が高いが、C類の特徴である頸部の沈線が不明瞭であることから、S字甕がやや変容した在地的なS字甕の可能性が高い。口縁部はS字状で外反する。外面に刺突は施されていない。胴部は羽状（横ハ字形）のハケ調整が、胴上部には横方向のハケ調整が行われている。台付甕（17）はく字形台付甕に伴う台部で、ハ字形に垂下する。外面には粗いハケ調整が行われている。台付甕（18）もく字形台付甕の台基部で、ハ字形に垂下する。

時期 SH02から出土した土師器にはS字甕C類が含まれることから、元屋敷II-1期（庄内式併行期、廻間II式期）に位置づけられる可能性が高い（鈴木2009）。また、SH01よりも新しく位置づけられる。

(4) 4号竪穴建物（SH04、第9・10図、第2表、巻頭図版2、図版3・6・9～11）

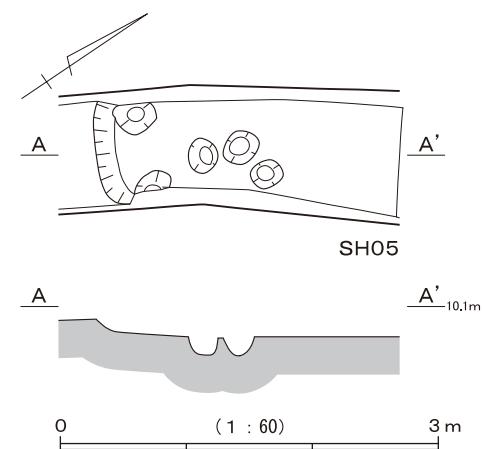
位置 SH04は、調査区北側に位置する。SH02と重複関係にある。調査時にはSH02の床面から連続する貼床がSH04の上部にまで及んでいると判断し、SH04→SH02の順に建設されたと判断した。また、SH03と近接しており、SH03とSH04の屋根の広がりを想定すると、両者が同時並存することは難しい。

特徴 SH04は南西辺と北西辺の一部が確認できただけである。南西辺が直線的であることから、SH01のように平面隅丸方形の建物であった可能性が高い。床面には貼床が行われた可能性が高い。建物の主軸はN-5°-Wであり、SH01・02と同様ほぼ真北にとる。規模は、南北5.2m以上、東西2.8m以上である。主柱穴や炉は確認できない。

なお、SH04の北部で焼土（図中網掛け部分）が確認できるが床面よりやや高い位置で検出しているため、炉であった場合にはSH04に伴うものではなく、平面形を検出できなかった別の竪穴建物に伴うものである可能性が高い。

遺物出土状況 遺物はSP40の北側で土師器高杯片（20）などが出土したほか、覆土中から土師器小型壺（21）などが出土した。

出土遺物 出土遺物は土師器片があるが、小片のため図化できないものが多い。確実にSH04に伴うのは土師器高杯（20）のみで、小型壺（21）はSH02に伴う可能性も残る。



第11図 SH05実測図

高杯（20）は有稜高杯の杯部片で、口縁部は稜から大きく開く形態である。小型壺（21）は、胴上部の破片で胴部は球胴であった可能性が高い。頸部以上は欠損しているが、く字形の頸部で単純口縁の壺であった可能性が高い。

時期 SH04は時期を特定できる遺物が出土していないが、SH02よりも古く位置づけられること、土師器高杯の形態から、弥生時代末～古墳時代前期初頭に位置づけられる可能性が高い。確定的ではないが、SH01と同時期の可能性が高い。

(5) 5号竪穴建物（SH05、第11図、図版8）

位置 SH05は、拡張区に位置し、SH03と重複関係にあ

る。SH05がSH03を破壊していることから、SH03→SH05の順で建設されたことがわかる。

特徴 南辺の一部を確認しただけであることから部分的な情報しか得られていないが、貼床が行われていた可能性が高い。平面方形の竪穴建物であるとすれば、主軸を北北東に向ける建物であった可能性が高い。建物内には小穴が確認できるが、いずれも奈良時代以降の遺物が出土しているため、主柱穴ではない。

出土遺物 土師器壺が出土したが、口縁部などが出土していないため図化していない。

時期 SH05は時期を特定できる遺物が出土していないが、出土した土師器から古墳時代前期初頭～前半に位置づけられる可能性が高い。

(6) 炉と思われる遺構 (SP04, 第4・5図)

調査区南側のB 2 グリッドの南西箇所で確認したSP04の内部は焼土であることから、竪穴建物の炉の可能性が高い。この想定が正しければ、上述した5軒の竪穴建物と同じ時期に形成された竪穴建物の残骸と想定できる。出土遺物はない。

2 掘立柱建物

土坑内に小穴が確認できるものを柱穴と判断し、掘方の形状や柱穴の位置から、少なくとも3棟以上存在すると判断した。3棟は柱穴内から須恵器や山茶碗などが出土していることから、奈良時代 (SB02)、中世以降 (SB01・03) の可能性が高い。

(1) 1号掘立柱建物 (SB01, 第12図, 図版3・8)

SB01-P1 (旧SK02) は調査区中央、B 3・C 3 グリッドに位置する。隅丸長方形の掘方で、底面の中央やや東よりに柱の痕跡が確認できる。長辺約0.9m、短辺約0.65m、深さ約0.25m (掘方底部)、根入れの深さ約0.5mである。柱は0.25m以下で、断面円形の柱であった可能性が高い。

SB01は、土層の観察では柱は抜き取られて廃絶した可能性が高い。

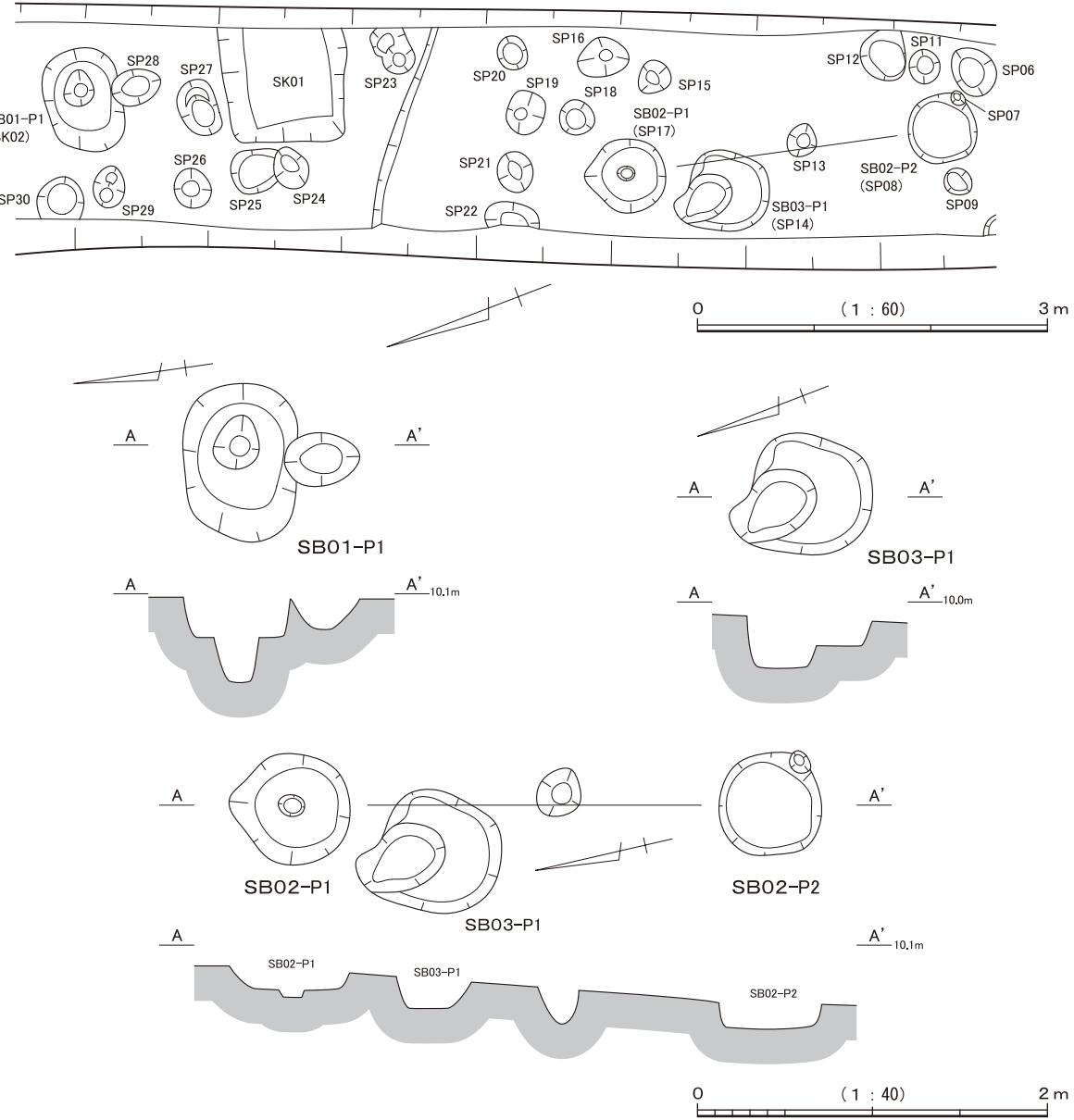
なお、柱は掘方より一段深くまで根入れがなされたと判断したが、掘方底面とした部分に地山の土砂を充填し、突き固めてあったため地山と判断してしまった可能性があり、本来は柱が根入れされた底面まで掘方が掘られていた可能性がある (後述するSB03-P1も同様)。

短辺をほぼ南北に向けることから、竪穴建物の主軸方位と一致しており、古墳時代前期まで遡る可能性もあるが、SB01-P1からの出土遺物は山茶碗、灰釉陶器などが出土しており、少なくとも12世紀以降の建物である可能性が高い。

(2) 2号掘立柱建物 (SB02, 第12図, 図版3・8)

SB02は、調査区南側、B 2 グリッドに位置する。SB03と重複関係にあり、出土遺物からみるとSB02のほうが古い可能性が高い。SB02はP1 (旧SP17)・P2 (旧SP08) を確認した。P2はSB03-P1 (旧SP14) と組み合わされてSB03を構成する可能性も残るが、規模や南辺の方向が一致することから判断して、P1とP2で同一の建物を構成する柱穴と判断した。この想定が正しければ、SB02-P1とP2間の距離は約2.8m (芯芯間距離) である。P1・P2は隅丸方形であり、P1のほぼ中央で柱の痕跡を確認できる。柱穴の規模はP1が東西約0.65m、南北約0.7m、P2が東西・南北ともに約0.6mである。P1の柱の痕跡は円形であり、断面円形の柱が用いられた可能性が高い。直径0.15mであるが、最下部であり、この大きさが柱の太さだったとは限らない。

P1・P2とともに須恵器と土師器片が出土しており、奈良時代以降である可能性が高い。



第12図 掘立柱建物実測図

(3) 3号掘立柱建物 (SB03, 第12図, 図版3・8)

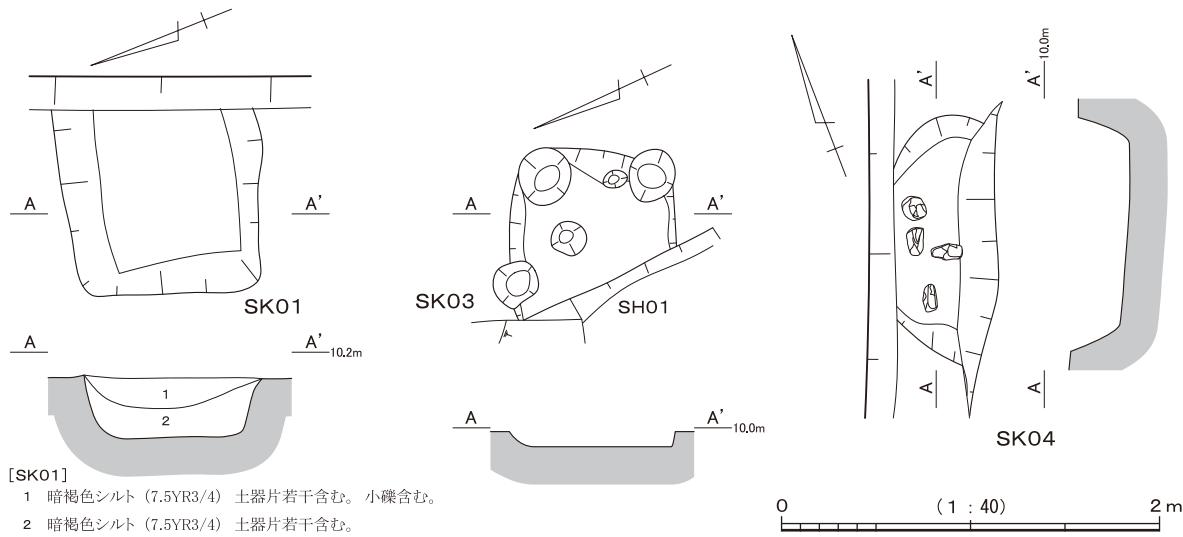
SB03は調査区南側、B 2 グリッドに位置する。SB02と重複関係にあり、出土遺物からみるとSB03の方が新しい可能性が高い。現状で柱穴1基のみの確認であり、規模、主軸方位などは一切不明である。P1は、隅丸方形の掘方である。北西隅角部に柱の痕跡が確認できるが、柱としては隅角に偏っているため、この小穴は柱の抜き取りに伴うものである可能性が高い。

P1からは図示していないが山茶碗小片が出土しており、12世紀以降の建物である可能性が高い。

3 土坑 (SK01・03・04, 第4・5・13・14図, 第1表, 図版7・12)

土坑は、3基 (SK01・03・04) 確認した。なお、調査段階でSK02とした遺構はSB01-P1に認定した。

SK01 SK01はB 3～C 3 グリッドに位置する。SH01の南側で確認した。東側は調査区外であり、確認できない。方形あるいは長方形の土坑で、東西1.0m以上、南北約1.1m、深さ約0.3mである。覆土中(上層)から、銅錢1点(25)、青磁片(22・23)、かわらけあるいは土師器片(24)などが出土した。



第13図 土坑実測図

青磁 2 片 (22・23) は鎬蓮弁碗 (B 1 類) の可能性が高く、中国・龍泉窯産で、13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる可能性が高い (原1999)。この 2 片は色調がややことなることから同一個体ではなく別個体である可能性が高い。かわらけあるいは土師器盤 (か?, 24) は平底で、口縁部はほぼ直立する。銅錢「咸平元寶」(25) は、輸入銭 (宋錢) で、初鑄は998 (真宗咸平元) 年である。

SK01の時期は、出土した青磁から13世紀後半以降に掘削された可能性が高い。

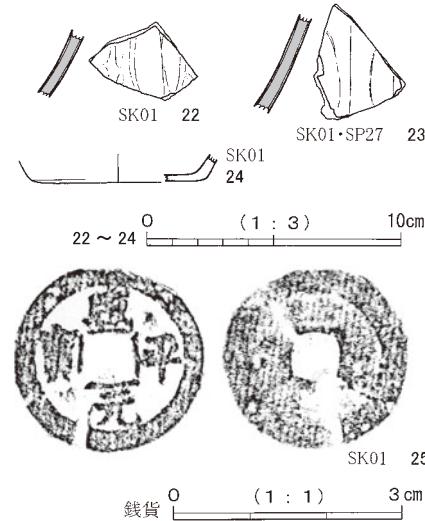
SK03 SK03はC 4 グリッド、SH01の東壁中央部東側に位置する。SH01と切り合い関係にあるが先後関係は不明である。SK03は浅いことから遺構ではない可能性がある。平面形は方形かあるいは長方形であり、東西0.9m以上、南北約0.9m、深さ約0.15mである。SK03からの出土遺物は土師器・須恵器であり、時期は奈良時代以降である。

SK04 SH01の北側、SH02の西側で確認したもので、内部からは人頭大より一回り小さい礫が数点出土しただけであり、風倒木の痕跡の可能性がある。南北に長く、長軸 (南北) 約1.3m、短軸 (東西) 0.55m以上、深さ約0.3mである。出土遺物は土師器であり、弥生時代末葉以降に位置づけられる。

4 小穴 (第4・5図, 第1表)

小穴は51基確認した (検出した55基のうち柱穴や炉となったSP04・08・14・17は除いている)。掘立柱建物の柱穴が多く含まれると想定するが、調査区が狭小で、同一の掘立柱建物に伴う柱穴の認定が難しいことから、本報告では無理に掘立柱建物を認定することは避け、今後の調査を俟つこととした。ここでは、小穴として報告し、第1表に、規模や深さ、出土遺物などをまとめた。出土遺物については、遺構外出土の遺物 (第15・16図, 図版12～15) とともに報告する。

小穴はいずれも円形 (あるいは不整形な円形) で、SP12やSP19などは深さ0.4～0.5mまで根入れが行われている。



第14図 SK01出土遺物実測図

5 小穴および遺構外出土遺物（第15・16図、第2～4表、図版12～15）

土師器（古式土師器） 遺構外から高杯、壺、甕が出土した（第15図）。高杯（26）は、小型高杯の脚基部片で、脚部はハ字形に垂下する。外面にはミガキ調整が行われている。高杯（27）は脚部片で、ハ字形に垂下する。内面には輪積み痕が残る。壺（28）は、折り返し口縁壺の口縁部片であり、口縁部外面に平坦面を造り出し、櫛による横方向の刺突文を4段以上行っている。菊川式土器の影響を受けた土器である可能性が高い。壺（29）は単純口縁壺の頸部から口縁部の破片で、頸部から外反し、口縁部は外傾する面を有する。壺（30）も単純口縁壺であるが、29と比較すると短く外反度が強い。内面の頸部と口縁部は屈曲により区分している。壺（31）は肩部片である。肩部に突起状の段差が設けられている。壺（32）も31同様肩部に有段をもつ壺であり、段の下位には波状文あるいは扇形文が描かれていた可能性が高い。壺底部（33・34）は上げ底である（と推測する）。甕は受口状口縁台付甕（37）と単純口縁台付甕（35・36）の2者が確認できる。35の口縁部外面には刻みが行われている。36・37の外面には刻み調整や刺突は行われていない。38はS字状口縁台付甕以外の台付甕の台基部片である。39は小型の台付甕の台部であり、ハ字形に垂下し、端部はさらに外反する。

ここで報告した土師器は、竪穴建物の時期と同時期に位置づけることができ、弥生時代末～古墳時代前期初頭に比定できる（鈴木一2009）。

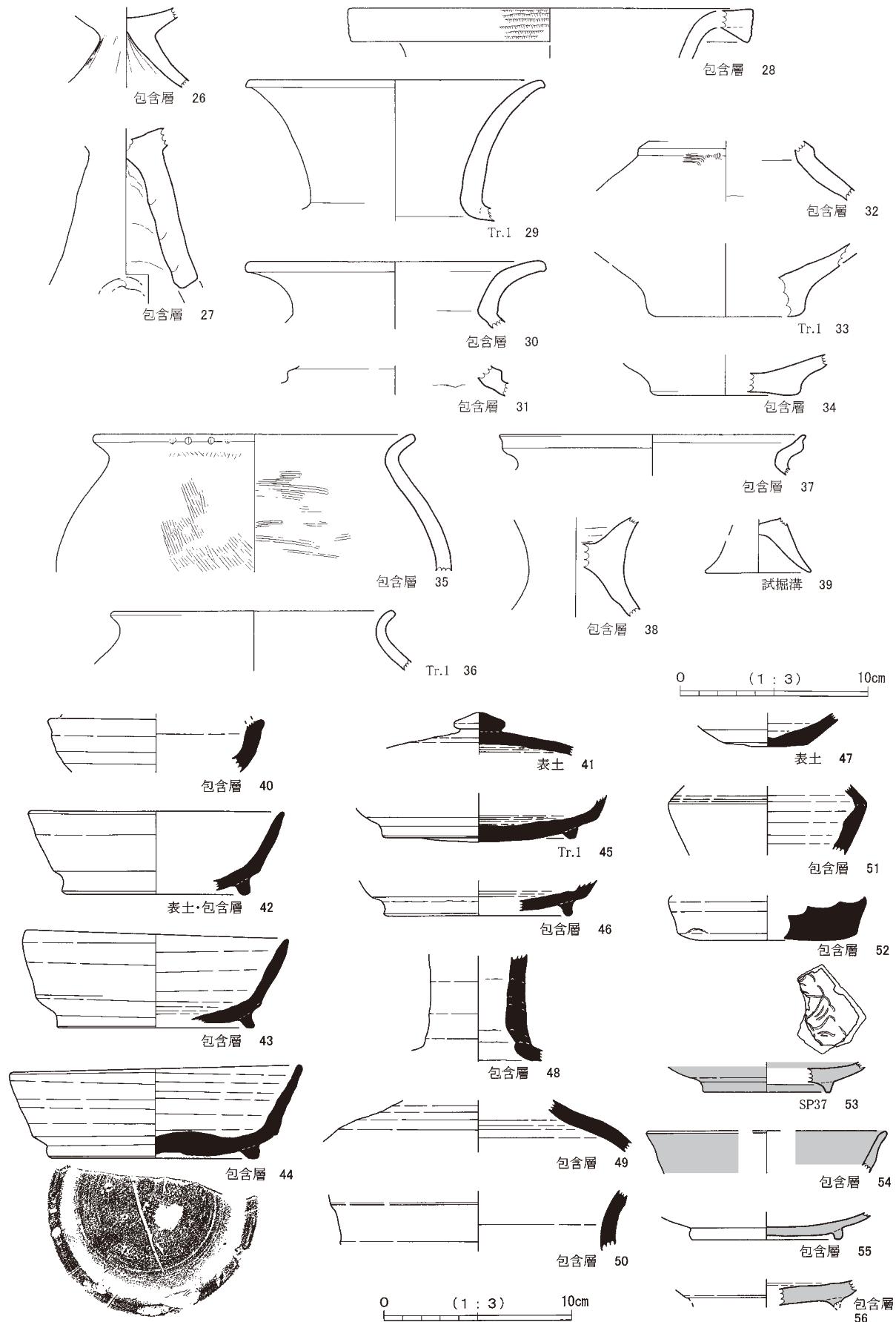
須恵器 表土や包含層から、須恵器杯身（40）、摘蓋（41）、有台杯（42～46）などが出土した。

杯身（40）はたちあがりをもつ杯身（杯H）である。たちあがりが失われていることから明確ではないが器壁が厚いことから古墳時代中期後半に位置づけられる可能性がある。摘蓋は1点（41）図示した。擬宝珠形の摘みである。この他、口縁部片も出土している。有台杯（42～46）は、箱形の杯部に高台がつくもので、底部と高台の関係から高台よりも底部が下がる（可能性がある）もの（42・45）、高台より内側になる（可能性が高い）もの（43・44・46）がある。なお、44の底部には「一」のヘラ記号が刻まれている。また、46は底面に自然釉薬が付着している。自然釉が発砲したような状況にあり、過度の焼成を受けていることが明らかである。倒置の状態で焼成された可能性がある。杯身あるいは壺瓶類の底部片（47）は、切り離したままの底部であり、平底に近い。底部外面にヘラ削り調整を行う。杯身（杯H）の可能性が高いと想定する。平瓶（48）は頸部片である。壺瓶類片（49）は肩が鋭角に屈曲しない、丸みをもつ長頸壺の肩部片であると想定する。甕（50）は頸部片で、破片の上部に突出度の低い稜が巡らされている。長頸壺（51）は肩が屈曲するもので、底部へ向かって急激に窄まる形態の長頸壺である。底部片（52）は鉢の底部片と想定するもので、非常に厚い。底面は平底である。

40を除いて近在する湖西古窯群産の可能性が高く、遠江IV期後半（47～49）～V期後半（41～46・51）、古墳時代終末期（飛鳥時代、7世紀後半）～奈良時代（8世紀）に位置づけられる（鈴木敏2004）。

緑釉陶器 緑釉陶器はSP37から1点（53）が出土した。53は、見込みに蓮華文を線刻する碗で、高台は貼り付けの輪（角）高台である（高橋1995）。釉薬は高台の内面や底部にも刷毛塗りされている。猿投産の可能性が高く、黒窓14号窯式（K-14）期、9世紀前半（平安時代前期）に位置づけられる（山下1995）。

灰釉陶器 灰釉陶器は3点（54～56）図示した。54は碗の口縁部破片であり、口縁部直下を強く撫でるが口縁端部の外反度は低いものである。釉薬はハケ塗りである。ハケ塗りであることから、時期は黒窓90号窯式（K-90）期～折戸53号窯式（O-53）期、9世紀後半～10世紀前半頃（平安時代前期～中期）に位置づけられようか（山下1995、以下同じ）。55は碗の底部片である。一部角高台ともとれる部分があるが、高台の大部分が内湾傾向にあることから、潰れた三日月高台の可能性が高い。三日月高台であることを考慮すれば、K-90併行期、9世紀後半（平安時代前期）に位置づけることができる。碗（56）は底部片で、三角高台である。O-53併行期に位置づけられる。灰釉陶器3点は猿投産あるいは地元の



第15図 小穴および遺構外出土遺物実測図①

二川産の可能性が高い。

山茶碗 山茶碗は包含層から渥美湖西産山茶碗の破片が数点出土した。57は口縁部～体部片で口径が13cm前後とやや小さいこと、口縁部が直立していることから、松井編年渥美湖西III－2期に位置づけられる可能性が高い。58・59は山茶碗の底部片で、低く潰れた高台であることから、58がIII－1期、59がIII－2期に位置づけられる（松井1989）。

63は山茶碗の可能性のある口縁部片で、口縁端部はやや外反する。自然釉が付着しているが茶色く発色している。過度の焼成を受けたためであろうか。あるいは自然釉ではなく、鉄釉の可能性も残るが、胎土が山茶碗と類似するため、山茶碗と判断した。

中世陶器 須恵器あるいは渥美の壺類の口縁部と想定する口縁部片（67）は、内湾しながら立ち上がり、口縁端部には平坦面が確認できる。厚手である。鉢であろうか？時期を特定することは難しい。

清郷甕（鍋） 60は清郷甕の口縁部片で、口縁部はほぼ直立した後で、外側へ向かって折れ曲り、外傾する面を有する。形態的な特徴から永井宏幸氏の鍋C 5類、10世紀後半（～11世紀前半）頃に位置づけられる（永井1996）。

渥美 片口鉢（69）の底部片である。体部は内湾しながら立ち上がり、底部は丸く低い高台が取り付けられる。12世紀ごろに位置づけられる（中野1995）。壺口縁部（68）は逆ハ字形に開くもので、渥美（湖西）産である可能性が高い。

青白磁 青白磁合子蓋片1点（77）が出土した。77は合子蓋の花文部分の周囲を花文に沿って打ち欠き、花形の文様板として再利用したものである。中国・景德鎮産の可能性が高く、時期は、12～13世紀頃に位置づけられる。

青磁 SH02付近で出土した龍泉窯の鎬蓮弁文碗（61・62）で、近接して出土したが特徴が異なることから同一個体ではなく本来2個体存在していた可能性が高い。鎬蓮弁の特徴からB 1類に区分することができる。このほか写真のみで図示していないが、同じく龍泉窯の鎬蓮弁文碗の破片と想定する鎬のない破片1点（78）が出土している。

瀬戸美濃（古瀬戸） 64は壺瓶類の肩部片で、肩部に施された円文（連珠文）から古瀬戸中期の瓶子である可能性が高い（藤澤2005）。この他図化していないが、折縁深皿片が出土している（第5章参照）。

瀬戸美濃（大窯） 小片1点（65）が出土した。口径が小さいことから皿類で、丸皿の可能性が高い。小片であることから時期を特定することは難しいが、大窯期（15世紀末～17世紀初頭）に位置づけられる（藤澤2002）。このほか図化していないが天目茶碗片と器種不明の破片2点が出土した（第5章参照）。

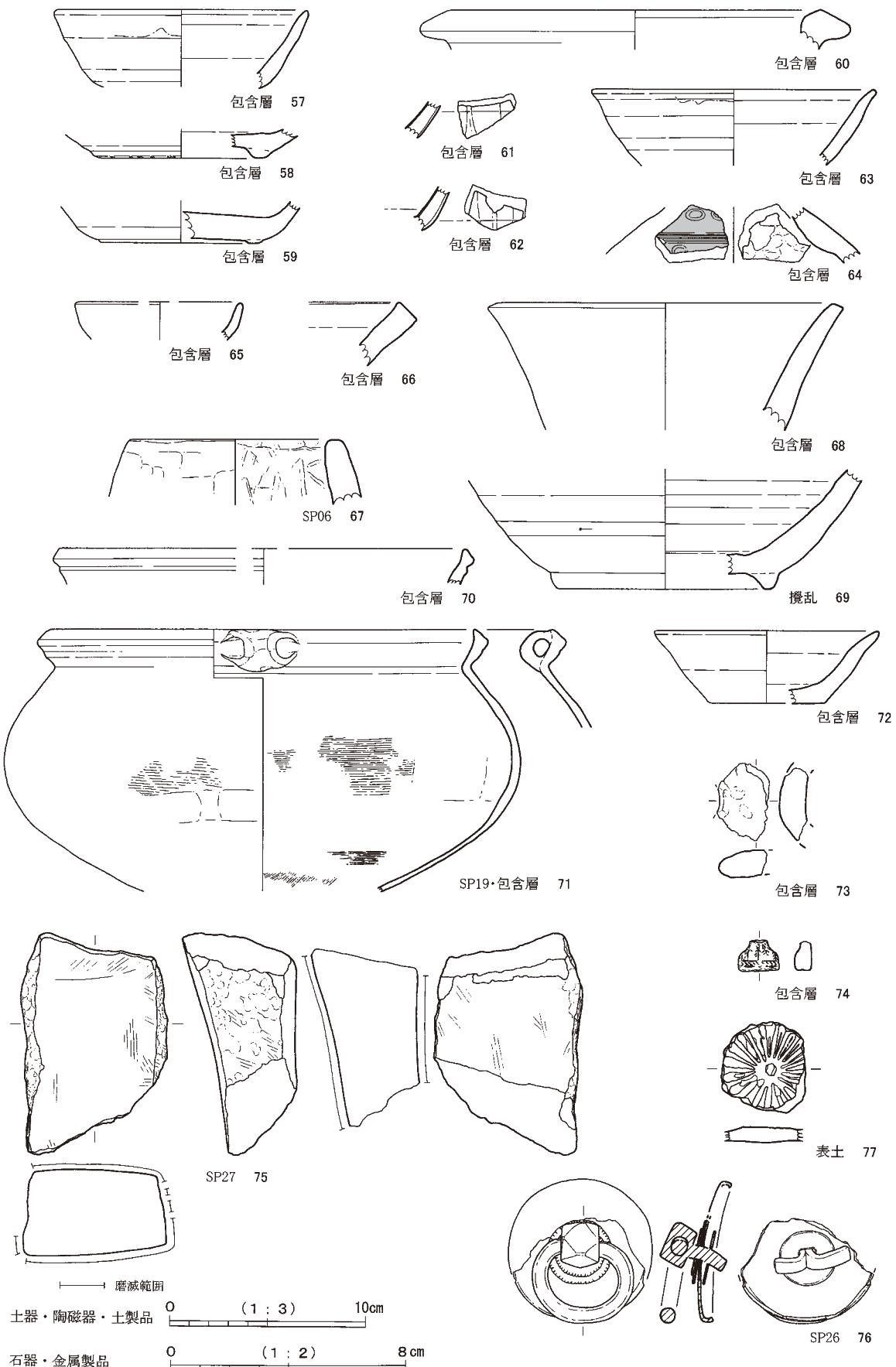
常滑 常滑の片口鉢が1点（66）を図示した。口縁部は外上方に向かって立ち上がるものであったと判断でき、残存する口縁端部は外傾する面を有する。口縁部の特徴から、常滑7型式、14世紀前半頃に位置づけられる（赤羽・中野1994）。

内耳鍋 内耳鍋は2点（70・71）図示した。いずれもく字形口縁の内耳鍋で、胴部は扁平な球胴で、口縁部は胴部からく字形に曲がり、口縁端部は内上方に向かって摘み出され、口縁部外面は外傾する面をもつ。口縁部の特徴から15世紀後半～16世紀後半に位置づけることができる（鈴木正1996）。

かわらけ ロクロ成形かわらけ1点（72）を図示した。底部は磨滅しており不明であるが、本来は糸切り痕が残っていた可能性が高い。口径が11cm前後であることから、戦国時代（16世紀ごろ）に位置づけられる（松井1993）。

鞴羽口 鞍羽口の破片と思われる小片（73）が出土した。外面は高温の焼成を受け溶解した痕跡が確認できる。先端部分に近い破片の可能性が高い。この存在から遺跡内で鍛冶生産が行われていた可能性が高いことが判明した。ただし、操業時期を特定することはできない。

土製品（人形） 小型の土製人形と想定される破片（74）が出土した。上半身部分が欠損している可能



第16図 小穴および遺構外出土遺物実測図②

性が高く、現状で凸形である。表面には上部（凸の突出部）と下部（凸の方形部）に段差がある。表面には文様が描かれ、下部には二本の横線の内側に羽状文を刻む。凸形の上部には上から外縁に沿って緩やかなS字状文を引き、それを中央にして羽状文（八字形）が刻まれる。同様の文様が凸形の中央にも確認できる。裏面は平坦で無文である。

表面の文様や形態からみると、仏像が結跏趺坐したような状況を示しているように観察できるが、確証はない。

砥石 SP27から出土した。砂岩製の大型の砥石（75）で、使用（磨滅）により外側から内側に向かって厚さを減じている。磨面には擦痕が残る。側面は大部分の表面が剥離しており、一部のみ残存する。残存長7.5cm、幅5.1cm、厚さ3.9cm以上である。

銅製品 SP26から、銅製円環付金具（76）が出土した。円形の座金具に、足を通し、その先端に円環を取り付けるもので、扇や簾筈などの家具（調度品）の把手あるいは引手の金具と想定する。大きさから判断すると扇の把手ではなく家具の可能性が高いと想定する。

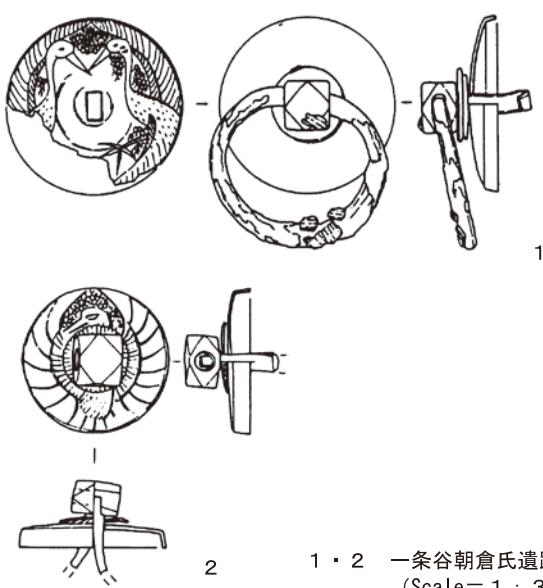
足と円環の固定方法は、各面を菱形に加工した銅製の金具に円環と足をとりつけるものであるが、残存状況が良好なため詳細な通し方については不明である。足の固定方法はΩ形に折り曲げているが、有機質のものを傷つけるのを防ぐ目的で緩衝材（緩衝具）の円形板状金具（ワッシャー）を挟み込んでいる。円形金具と座金具の間は5mm程度であり、薄い板に取り付けられていた可能性が高い。座金具は外側に細かい刻みをいたれた円形（花形）金具を2枚重ね、さらに本来の一回り大きいキャップ形の円形金具を組み合わせている。足の先端部分の各面を菱形に加工することや、座金具を3枚重ねること、うち2枚に細かい刻みが入れられていることから非常に手の込んだ細工が施されているといえる。

類例は、福井県一条谷朝倉氏遺跡出土資料の中に確認できる（南1998、第17図）。知波田遺跡出土例と構造や特徴が一致しており、同様の性格を有する金具と考えてよい。一条谷朝倉氏遺跡では、家具類の把手と想定されている（南1998）。

時期は明確ではないが、一条谷朝倉氏遺跡の事例から戦国時代には存在していることが判明することから、知波田小学校遺跡のものも中世後期（戦国期）に位置づけられようか。

銅製円環付金具について 知波田小学校遺跡から出土した円環付金具については、上述したように簾筈などの家具（調度品）の把手の可能性が高いが、一条谷朝倉氏遺跡出土品は鶴の装飾が施されるなど手の込んだ仕上げとなっている。また、形状が類似する広島県尾道市浄土寺の重要文化財「経箱」の把手は若干形状が異なるため、知波田小学校や一条谷朝倉氏遺跡出土品がすぐさま経箱の金具と断定はできないものの、装飾性の高い調度品に取り付けられたと想定しておく必要がある。

また、円環付金具が一般的な集落からは出土していないことにも注意しておく必要がある。一条谷朝倉氏遺跡では、中規模武家屋敷と想定される屋敷地等で確認されており、装飾的な意匠と相俟って、身分の高い武士や貴族、寺院などの調度品に用いられた金具であることも想定しておく必要がある。



第17図 円環付金具の類例

6 遺構・遺物観察表（第1～5表）

(1) 土坑および小穴の概要

第1表 土坑および小穴の概要

遺構番号	グリッド	形 状	長 径 (長軸)	短 径 (短軸)	深 さ	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK01	B3・C3	長方形	1.10	1.00	0.30	銅錢・青磁・山茶碗他	中世以降	
SK02	B3・C3	隅丸長方形	0.90	0.65	0.50	土師器・須恵器・山茶碗他	中世以降	SB01-P1とした。
SK03	C4	長方形or方形	0.90	0.90	0.15	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SK04	C4・5	楕円形？	1.30	0.55	0.30	土師器	—	風倒木？
SP01	B1・2	円形	0.30	0.30	0.20	土師器	—	
SP02	B1	楕円形	0.25	0.20	0.05	—	—	
SP03	B2	楕円形	0.30	0.20	0.20	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP04	B2	楕円形	0.40	0.30	0.05	—	—	竪穴建物の炉か
SP05	B2	楕円形	0.30	0.30	0.25	土師器・山茶碗	—	
SP06	B2	楕円形	0.45	0.35	0.20	土師器・須恵器・渥美？	中世以降	
SP07	B2	楕円形	0.15	0.10	0.05	—	—	
SP08	B2	隅丸方形	0.60	0.60	0.15	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	SB02-P2とした。
SP09	B2	円形	0.25	0.25	0.10	—	—	
SP10	B2	円形？	0.35	0.20	0.10	土師器	中世以降	
SP11	B2	円形	0.30	0.25	0.25	土師器・須恵器・常滑	中世以降	
SP12	B2	不整楕円形	0.45	0.40	0.50	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP13	B2	不整楕円形	0.30	0.25	0.20	土師器・鍋	中世以降	
SP14	B2	隅丸方形	0.85	0.75	0.30	土師器・須恵器・山茶碗	中世以降	SB03-P1とした。
SP15	B2	不整楕円形	0.30	0.25	0.20	—	—	
SP16	B2	不整楕円形	0.45	0.35	0.35	土師器	—	
SP17	B2	隅丸方	0.70	0.65	0.15	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	SB02-P1とした。
SP18	B2	円形	0.30	0.30	0.30	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP19	B2・3	円形	0.40	0.30	0.45	土師器・須恵器・鍋	中世以降	
SP20	B2・3	円形	0.30	0.25	0.20	土師器・須恵器	中世以降	
SP21	B3	円形	0.35	0.30	0.30	須恵器・土師器	古墳時代後期以降	
SP22	B3	楕円形？	0.45	0.20	0.30	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP23	B3	瓢形	0.45	0.25	0.35	須恵器	古墳時代後期以降	
SP24	B3	不整円形	0.35	0.30	0.15	土師器	—	
SP25	B3	不整楕円形	0.35	0.40	0.15	土師器	—	
SP26	B3	円形	0.35	0.30	0.35	土師器・須恵器・銅製円環付金具	中世以降	
SP27	B3	楕円形	0.50	0.30	0.35	土師器・須恵器・青磁・鍋・砥石	中世以降	
SP28	B3・C3	楕円形	0.45	3.50	0.20	山茶碗	中世以降	
SP29	B3	不整円形	0.35	0.25	0.25	—	—	
SP30	B3	円形？	0.40	0.35	0.20	土師器	—	
SP31	C4	不整瓢形	0.50	0.25	0.25	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP32	C4	不整円形	0.30	0.30	0.30	土師器・須恵器	古墳時代後期以降	
SP34	C5	円形	0.25	0.25	0.10	—	—	
SP35	C5	円形？	0.30	0.20	0.10	—	—	
SP36	C5	円形	0.15	0.15	0.10	土師器	—	
SP37	C4	円形	0.30	2.30	0.10	土師器・須恵器・緑釉陶器	平安時代以降	
SP38	C4	不整円形	0.25	0.25	0.15	土師器	—	
SP39	C4	円形	0.20	0.20	0.10	—	—	
SP40	C4	円形	0.25	0.25	0.10	土師器・須恵器	—	
SP42	C4	円形	0.20	0.20	0.10	—	—	
SP43	C6	楕円形	0.40	0.25	0.10	—	—	
SP44	C6	円形	0.30	0.30	0.15	—	—	
SP45	C6	円形	0.35	0.30	0.15	山茶碗・土師器	中世以降	
SP46	C5	楕円形	0.30	0.25	0.10	—	—	
SP47	C5	不整円形	0.30	0.25	0.10	土師器	—	
SP48	C5	不整楕円形	0.30	0.50	0.10	土師器	—	
SP49	C6	楕円形	0.25	0.20	0.05	—	—	
SP50	B6	円形？	0.35	0.20	0.20	—	—	
SP51	B6	不整円形？	0.25	0.15	0.20	—	—	
SP52	B6・7	方形	0.30	0.25	0.15	—	—	
SP53	B6・7	不整円形	0.25	0.25	0.15	—	—	
SP54	B7	不整円形	0.25	0.25	0.15	—	—	
SP55	B7	方形	0.25	0.20	0.05	—	—	

*土坑・小穴番号は調査時のもの。土坑・小穴から掘立柱建物などに変更したものは備考に新遺構番号を記した。
※上記により新遺構番号を付加したものについては、全体図などには新遺構番号と旧遺構番号を併記した。

単位 (m)

(2) 出土遺物観察表

第2表 土器・陶磁器・土製品観察表

No.	捕団	図版	出土位置	種別	器種	部位	残存	口径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考
1	8	10	SH01	土師器	高杯	杯部～脚部	70	—	12.6	—	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(7.5YR7/6)	3方向透かし
2	8	10	SH01	土師器	高杯	脚基部	80	—	—	—	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	
3	8	10	SH01	土師器	高杯	脚部	60	—	(11.0)	—	橙(5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	3方向透かし
4	8	10	SH01	土師器	台付甕	口縁部	10	(27.1)	—	—	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/8)	受口状口縁
5	8	10	SH01	土師器	壺	口縁～胴部	60	(11.6)	—	—	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)	
6	8	10	SH01	土師器	壺	胴部	40	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/2)	灰白(10YR7/1)	
7	10	11	SH02	土師器	小型鉢	全体	70	(7.6)	3.6	3.8	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
8	10	11	SH02	土師器	高杯	杯部	15	(19.0)	—	—	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	有稜高杯
9	10	11	SH02	土師器	高杯	杯部～脚部	80	—	9.8	—	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	3方向透かし
10	10	11	SH02	土師器	高杯	脚基部	—	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/2)	浅黄橙(10YR8/3)	3方向透かし
11	10	11	SH02	土師器	高杯	脚基部	60	—	—	—	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	3方向透かし
12	10	11	SH02	土師器	高杯	脚基部	70	—	—	—	にぶい赤褐色(5YR5/3)	にぶい橙(5YR6/4)	3方向透かし
13	10	11	SH02	土師器	壺	口縁～頸部	75	14.0	—	—	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(2.5YR6/6)	
14	10	11	SH02	土師器	甕	口縁～胴部	40	(12.6)	—	—	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
15	10	11	SH02	土師器	壺	胴部～底部	50	—	4.5	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
16	10	11	SH02	土師器	S字甕	口縁～胴部	60	(17.3)	—	—	灰黄(2.5Y6/2)	浅黄(2.5Y8/3)	S字甕C類
17	10	11	SH02(SP48)	土師器	台付甕	台部	40	—	(8.6)	—	にぶい橙(5YR7/3)	淡橙(5YR8/3)	
18	10	11	SH02	土師器	台付甕	台基部	70	—	—	—	にぶい褐(7.5YR6/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
19	10	10	SH03	土師器	壺	底部	60	—	6.0	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	
20	10	10	SH04	土師器	高杯	杯部	20	—	—	—	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	有稜高杯
21	10	11	SH04	土師器	小形壺	胴部	20	—	—	—	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	SH02に伴うか?
22	14	12	SK01	青磁	碗	体部	10未満	—	—	—	明オーリーブ灰(5GY7/1)	明オーリーブ灰(5GY7/1)	鎧蓮弁文
23	14	12	SK01・SP27	青磁	碗	体部	10未満	—	—	—	明オーリーブ灰(5GY7/1)	明オーリーブ灰(5GY7/1)	鎧蓮弁文
24	14	12	SK01	かわらけ?	ロクロ?	底部	20	—	(7.0)	—	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	土師器盤?・13C?
26	15	12	包含層	土師器	高杯	脚基部	60	—	—	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(2.5Y8/2)	
27	15	12	包含層	土師器	高杯	脚基部～脚部	30	—	—	—	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
28	15	12	包含層	土師器	壺	口縁部	—	(21.6)	—	—	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	
29	15	12	Tr.1	土師器	壺	口縁部	50	(16.0)	—	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	
30	15	12	包含層	土師器	壺	口縁部	8	(16.0)	—	—	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	
31	15	12	包含層	土師器	壺	肩部	12	—	—	—	浅黄橙(10YR8/3)	灰(5Y5/1)	赤彩?
32	15	12	包含層	土師器	壺	肩部	—	—	—	—	淡黄(2.5Y8/3)	浅黄橙(7.5YR8/4)	
33	15	12	Tr.1	土師器	壺	底部	12	—	(8.0)	—	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
34	15	12	包含層	土師器	壺	底部	35	—	(8.0)	—	浅黄橙(7.5YR8/3)	褐灰(10YR4/1)	
35	15	12	包含層	土師器	台付甕	口縁～胴部	12	(17.2)	—	—	にぶい橙(7.5YR7/4)	灰(7.5Y4/1)	
36	15	12	Tr.1	土師器	台付甕	口縁部	18	—	—	—	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	
37	15	12	包含層	土師器	台付甕	口縁部	16	(16.4)	—	—	淡黄(2.5Y8/3)	灰黄(2.5Y7/2)	受口状口縁
38	15	12	包含層	土師器	台付甕	台基部	30	—	—	—	橙(5YR7/8)	橙(7.5YR7/6)	
39	15	12	試掘溝	土師器	台付甕	台部	80	—	5.6	—	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
40	15	13	包含層	須恵器	杯身	口縁～体部	10	(11.5)	—	—	青灰(5BG5/1)	暗オーリーブ灰(2.5GY8/1)	
41	15	13	表土	須恵器	摘蓋	摘み	20	—	—	—	灰白(5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	湖西産
42	15	13	表土・包含層	須恵器	有台杯	全体	18	(13.6)	(10.0)	4.45	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	湖西産
43	15	13	包含層	須恵器	有台杯	全体	40	(14.0)	(10.9)	4.9	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	湖西産
44	15	13	包含層	須恵器	有台杯	全体	65	(15.6)	(11.2)	5.0	灰白(5Y7/2)	浅黄(2.5Y7/4)	湖西産
45	15	13	Tr.1	須恵器	有台杯	底部	80	—	10.3	—	灰白(7.5Y8/1)	淡黄(5Y8/3)	湖西産
46	15	13	包含層	須恵器	有台杯	底部	20	—	(10.0)	—	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(2.5Y8/2)	湖西産
47	15	13	表土	須恵器	杯身?	底部	85	—	4.5	—	オーリーブ灰(2.5GY6/1)	明オーリーブ灰(5GY7/1)	湖西産
48	15	13	包含層	須恵器	平瓶	頸部	20	—	—	—	浅黄(2.5Y7/4)	灰黄(2.5Y7/2)	湖西産
49	15	13	包含層	須恵器	長頸壺か	肩部	17	—	—	—	黄褐(2.5Y5/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	湖西産
50	15	13	包含層	須恵器	壺	頸部	12	—	—	—	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/2)	湖西産
51	15	13	包含層	須恵器	鉢か	底部	25	—	(9.6)	—	灰(7.5Y5/1)	灰オーリーブ(5Y6/2)	湖西産
52	15	13	包含層	須恵器	鉢か	底部	20	—	(6.8)	—	綠黒(5G2/1)	—	湖西産
53	15	13	SP37	緑釉陶器	碗	底部	—	—	—	—	灰白(7.5Y7/1)	オーリーブ灰(10Y6/2)	K14(窯元産)
54	15	14	包含層	灰釉陶器	碗	口縁部	—	—	—	—	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	K90
55	15	14	包含層	灰釉陶器	碗	底部	40	—	7.8	—	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	K90
56	15	14	包含層	灰釉陶器	碗	底部	20	—	(7.5)	—	灰白(10Y7/1)	灰白(5Y7/1)	O53
57	16	14	包含層	山茶碗	碗	口縁～体部	10	(13.0)	—	—	灰黄(2.5Y7/2)	淡黄(2.5Y8/3)	渥美湖西
58	16	14	包含層	山茶碗	碗	底部	20	—	(8.0)	—	褐灰(10YR6/1)	灰白(10YR7/1)	渥美湖西
59	16	14	包含層	山茶碗	碗	底部	25	—	(7.4)	—	褐灰(10YR6/1)	灰白(10YR7/1)	渥美湖西
60	16	14	包含層	土師器	清郷甕	口縁部	10未満	(22.0)	—	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	10世紀後半
61	16	12	包含層	青磁	碗	体部	10未満	—	—	—	オーリーブ灰(10Y6/2)	オーリーブ灰(10Y6/2)	鎧蓮弁文碗
62	16	12	包含層	青磁	碗	体部	10未満	—	—	—	オーリーブ灰(2.5GY6/1)	オーリーブ灰(2.5GY6/1)	鎧蓮弁文碗
63	16	14	包含層	山茶碗?	碗	口縁～体部	10	(14.6)	—	—	にぶい黄(7.5Y6/4)	にぶい黄(10YR7/4)	渥美湖西?
64	16	14	包含層	古瀬戸	瓶子	肩部	10	—	—	—	灰白(2.5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/3)	古瀬戸中期
65	16	14	包含層	瀬戸美濃	丸皿	口縁～体部	5	—	—	—	黒褐(2.5Y3/1)	黒褐(2.5Y3/1)	大窯期
66	16	14	包含層	常滑	鉢	口縁部	7	—	—	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい黄(7.5YR6/4)	常滑7型式
67	16	14	SP06	中世陶器?	鉢か	口縁部	25	(11.0)	—	—	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	渥美か須恵器
68	16	14	包含層	渥美?	壺?	口縁部	8	(18.2)	—	—	灰(7.5Y4/1)	灰(5Y5/1)	
69	16	14	攪乱	渥美	片口鉢	体部～底部	20	—	(10.8)	—	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	
70	16	—	包含層	土師質	内耳鍋	口縁部	10未満	—	—	—	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	
71	16	14	SP19・包含層	土師質	内耳鍋	口縁～胴部	30	(21.7)	—	—	灰白(10YR8/2)	浅黄橙(10YR8/3)	
72	16	14	包含層	かわらけ	ロクロ	全体	20	(11.4)	(6.0)	3.7	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	
73	16	14	包含層	土製品	輪羽口	口縁～胴部	10未満	—	—	—	灰(7.5Y6/1)	橙(5YR6/6)	中世以降か
74	16	13	包含層	土製品	人形か	—	—	—	—	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	近世か?	
77	16	—	表土	青白磁	合子	蓋	40	(3.2)	—	(0.6)	灰白10Y(8/1)	灰白7.5Y(8/1)	景德鎮産
78	—	12	包含層	青磁	碗	体部	10未満	—	—	—	オーリーブ灰(2.5GY6/1)	オーリーブ灰(2.5GY6/1)	鎧蓮弁文碗?

※括弧内は復原値
単位 残存率(%) 口径～器高(cm)

第3表 金属製品観察表

No.	挿図	図版	出土位置	器種	材質	奥行き	座金具直径	把手(円環)径	重量	備考
76	16	15	SP26	円環付金具	銅	4.4+	(4.9)	3.4	33.77	

※括弧内は復原値 「+」以上

単位 (cm・g)

第4表 石製品観察表

No.	挿図	図版	出土位置	器種	材質	全長	幅	厚さ	重量	備考
75	16	14	SP27	砥石	砂岩	(7.50)	5.1	3.9	142.30	

※括弧内は残存値

単位 (cm・g)

第5表 銅錢観察表

No.	挿図	図版	出土位置	器種	国	初鑄年	錢径	内径	孔幅	重量	備考
25	14	12	SK01	咸平元寶	宋	998年	2.45	1.90	0.60	2.69	

単位 (cm・g)

第5章 結語

1 弥生時代末～古墳時代前期

時期 知波田小学校遺跡は定型的な前方後円墳である奈良県箸墓古墳（布留式土器併行期）が築造される直前の段階（庄内式土器併行期）の遺物群（元屋敷式期）であり、研究者によって弥生時代末とするか、古墳時代初頭とするか判断が分かれることである。したがって、本書では、弥生時代末～古墳時代前期（初頭）として報告した。土器に見られる受口状口縁の残存、置石炉の存在による弥生時代的な様相と、土師器の脚部が外反傾向であることなどの古墳時代的な特徴がみられる弥生から古墳時代の移行的な様相を示している。

豊穴建物 豊穴建物は5棟確認し、SP04の焼土が豊穴建物の炉であるとすれば、6棟の存在している可能性がある。豊穴建物4棟（SH01～04）はおおむね主軸方位を北からやや西側に向ける点が一致しており、建物の建築にあたって、規範（決まり）があった可能性が高い。また、豊穴建物の平面形態は、やや隅角が丸みを帯びるもののはほぼ正方形の豊穴建物である可能性が高い。

置石炉 豊穴建物は部分的な検出に留まったが、SH03で炉が確認され、この炉は炉の一部に石材を使用する置石炉であることが確認できた。丸杉俊一郎氏の研究により、置石炉は県内では浜名湖北岸～天竜川平野北部、小笠山北西丘陵に限定されることが判明し、また東三河の豊橋市橋良遺跡などでも確認されている（丸杉2008）。東三河や浜名湖北岸～都田川流域では弥生時代中期のものが大部分で、天竜川平野北部の東原遺跡や小笠山北西丘陵では弥生時代後期が多い（丸杉2008）。この点から考えると、まず東三河や浜名湖北岸で採用されたものが他地域に影響を与え、天竜川平野北部や小笠山丘陵で出現したと想定できる。知波田小学校遺跡は時期的には弥生時代末～古墳時代初頭にあたり、東三河や浜名湖北岸の周辺地域にあたるため、東三河と浜名湖北岸地域の影響により置石炉が採用されたといえるとともに、時期的にはこれまで確認された中では最も新しい時期まで残存していることから置石炉の設置の最終段階のものとすることができる。

土師器 出土遺物は、土師器のみである。図示していない個体を含めて、高杯が多く、このほか受口状口縁台付甕、S字状口縁台付甕（S字甕）、単純口縁壺、折り返し口縁壺、小型壺などが出土した。S字甕C類については、その特徴である頸部の沈線が不明瞭であるなど、在地的な変容を受けている可能性が高い（註2）。

2 奈良・平安時代

奈良時代 奈良時代の遺構は不明確であるが、掘立柱建物SB02がこの時期の可能性がある。出土した遺物では、一般的な集落で出土することが多い土師器甕（遠江型甕）の破片が少なく、図示できるほどの破片が存在しなかった。須恵器では、焼成状況が不良で、軟質に仕上がって白褐色を呈するものや、底面に釉薬が厚く付着したものなどが確認できる。知波田小学校遺跡が奈良時代に集落であったとしても一般的な集落ではなく、須恵器生産に関係するような集落であった可能性がある。

平安時代 知波田小学校遺跡では明確にこの時期に位置づけられる遺構はない。平安時代には、大知波峠廃寺（9～11世紀）が建立され、それに関連する寺院・塔頭が湖西連峰の各所に築かれた可能性が高い。知波田小学校遺跡でも、緑釉陶器、灰釉陶器、清郷甕などが出土しており、遺物の時期的な傾向は大知波峠廃寺と同様であることから、知波田小学校遺跡も大知波峠廃寺と関連する仏教寺院あるいはそれを支えるような集落であった可能性が高い。

3 中世

(1) 中世陶磁器について

知波田小学校遺跡では、遺跡の性格を特定できるような中世の遺構は出土していないが、中世土器は青磁・青白磁をはじめ、古瀬戸などが出土している。45m²の調査で1m²あたり2.6片が出土していることから他の遺跡と比較すれば、この時期においては非常に多いといえるだろう。

中世陶磁器は山茶碗、かわらけ、土師質内耳鍋、常滑、瀬戸美濃、貿易陶磁が出土している。

山茶碗は山茶碗の産地（渥美湖西窯）が近接するため渥美湖西系の山茶碗に限定され、松井編年III-1期・III-2期の製品が確認できる。おおむね13世紀代に位置づけられる。

陶器では瀬戸美濃の古瀬戸中期、大窯期の陶器が出土している。碗皿類が多いが、古瀬戸中期（13世紀末～14世紀後半）の瓶子が出土している。大窯期（おおむね16世紀）の瀬戸美濃は時期を特定するのが難しいものであるが、碗皿が出土している。常滑では常滑7型式が出土しており、14世紀前半頃に位置づけられる。したがって、陶器からみると、15世紀代の土器がない。

一方、土師質土器では、かわらけや土師質鍋が出土しているが、15世紀後半～16世紀頃のものが多い。かわらけの数量がそれほど多くはないことに特徴がある。

陶磁器の中では貿易陶磁が青白磁1点、青磁5点と陶器の破片の約10%であり、貿易陶磁の割合が多いといえる。

4 知波田小学校遺跡の動向

調査の結果、知波田小学校遺跡は出土した遺物から弥生時代末～古墳時代前期《知波田小I期》、古墳時代末（7世紀末）～平安時代中期（10世紀中頃）《知波田小II期》、鎌倉時代～室町時代前半（13世紀～14世紀）《知波田小III期》、戦国時代（16世紀）《知波田小IV期》、近世《知波田小V期》に人為が及んでいたことが確認できる。一方、古墳時代中期～終末期（5～7世紀末）、平安時代中・後期（11～12世紀）、15世紀前半（室町時代）が少ないことが判明する。

遺跡の調査が小規模であることから、今回の調査で空白となった時期についてもその時期の遺構・遺物が出土する可能性が高いが、人為が及ばない時期が存在することには注意が必要である。その人為が及ばない時期と周辺の遺跡との関係を明らかにすることで、知波田小学校遺跡の性格も徐々に判明していくと想定している。以下、各時期の特徴をまとめて報告を終えたい。

第6表 中世土器・陶磁器一覧表

器種組成表

項目	破片数
山茶碗類	36
山茶碗	32
小碗	2
小皿	2
不明	
土師質土器類	49
皿	13
鍋類	36
窯類	
不明	
常滑（知多）	7
甕	6
壺類	
鉢類	1
不明	
渥美湖西産	3
壺甕類	2
鉢類	1
瀬戸・美濃産	6
天目	1
碗類	
皿類	1
盤類	
鉗皿類	
擂鉢	
壺瓶類	
仏具類	
鉢類	
古瀬戸（折縁深皿）	1
古瀬戸（瓶子）	1
不明	2
貿易陶磁	6
青磁 碗類	5
青白磁 その他	1
その他陶器類	3
合計	110
調査面積（m ² ）	45
m ² あたり点数	2.6

山茶碗分類一覧

渥美・湖西系								
	I-1期 破片	I-2期 破片	II期 破片	III-1期 破片	III-2期 破片	III-3期 破片	時期不明 破片	合計
山茶碗				1	3			28 32
小碗								2 2
小皿					1			1 2
合計	0	0	0	2	3	0	31	36

土師質土器分類一覧

器種	かわらけ (ロクロ)
	破片
	13

器種	内耳鍋 (くの字形)
	破片
	44

貿易陶磁分類一覧

機種名	分類	年代		破片数
		B1類	13世紀中葉～14世紀前半	
青磁	碗		不明	4
青白磁	合子		不明	1
			不明	1

知波田小Ⅰ期 置石炉や土師器の特徴から浜名湖北岸との関係が想定でき、浜名湖北岸からの移植した集団のムラの可能性を考えておく必要がある。

知波田小Ⅱ期 古墳時代の終わりごろ～10世紀後半まで続く。大知波峠廃寺は9世紀頃に建立が開始されることから、それ以降は大知波峠廃寺へ向かう重要な位置にある遺跡として機能していた可能性が高いが、大知波峠廃寺よりもやや早く遺跡に人為が及ぼなくなった可能性がある。

知波田小Ⅲ期 鎌倉時代に人為が及び14世紀代まで続く。この時期は近接する向雲寺が真言宗から時宗へ改宗した段階で、知波田小学校遺跡が存続する時期に、真言宗段階と時宗段階の向雲寺の寺院が存在していた可能性が高い。知波田小学校遺跡はその寺院と何らかの関係があったと想定できる。

知波田小Ⅳ期 16世紀代に武家屋敷や町屋とは考えにくいため、知波田小Ⅲ期から続いて近在する向雲寺などの寺院との関係の深い遺跡である可能性が高い。

知波田小Ⅴ期 近世の遺物も若干出土しており、この時期の様相は不明確であるが、中世段階から継続して向雲寺などの寺院との関係があった可能性が高い。

【註】

- 1 知波田小学校遺跡の考古学的な情報について、湖西市教育委員会 後藤建一・岡本 聰両氏、浜松市文化財課 鈴木敏則氏に御教授頂いた。
- 2 古式土師器については、浜松市文化財課 鈴木一有氏に御教授頂いた。

【参考文献】

- 赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって資料集』 日本福祉大学
新居町教育委員会 1991 『三ツ谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(静岡県浜名郡新居町)
新居町教育委員会 1993 『寺川遺跡・天白遺跡・西脇遺跡』(静岡県浜名郡新居町)
新居町教育委員会 2006 『特別史跡新居関跡発掘調査報告書III』(静岡県浜名郡新居町)
金子建一 2005 「羽釜形土器からみた中世の東海」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』2005菊川シンポジウム実行委員会
湖西市教育委員会 1985 『観音山遺跡』
湖西市教育委員会 1997 『大知波峠廃寺跡』
菊川町教育委員会 1999 『横地城跡－総合調査報告書一』(静岡県小笠郡菊川町)
後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
後藤建一 1991 「東海 B 静岡」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳』
鈴木一有 2002 「古墳時代前期にかんする問題」『恒武西宮遺跡』 浜松市文化協会
鈴木一有 2009 「北神宮寺遺跡における古墳時代前期の集落構造」『北神宮寺遺跡』 浜松市文化振興財団
鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕のデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社
永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮沸具の変遷」『鍋と甕のデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
中嶋郁夫 1997 「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』13号 静岡県
中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説中世土器・陶磁器』 真陽社
贊 元洋 1998 「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』30号 静岡県考古学会
贊 元洋 2009 「二川窯の概要」『灰釉陶器のブラインドテスト』 東海土器研究会
浜松市教育委員会 2008 『坊ヶ跡遺跡』 浜松市文化振興財団
原 廣志 1999 「横地氏関連遺跡群と周辺の遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書』 菊川町教育委員会
藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき』 同成社
松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
松井一明 1993 「東海地域のかわらけ編年について」『久野城IV』 袋井市教育委員会
丸杉俊一郎 2008 「都田川流域における弥生中期の諸問題」『井通遺跡II』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
南 洋一郎 1998 「一条谷朝倉氏遺跡出土の金属製品」『北陸中世の金属器』 北陸中世考古学研究会
山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社

図版1



1. 知波田小学校遺跡 遠景①(南西から)

▲の交点が調査範囲



2. 知波田小学校遺跡 遠景②(東から)

▲の交点が調査範囲

図版2

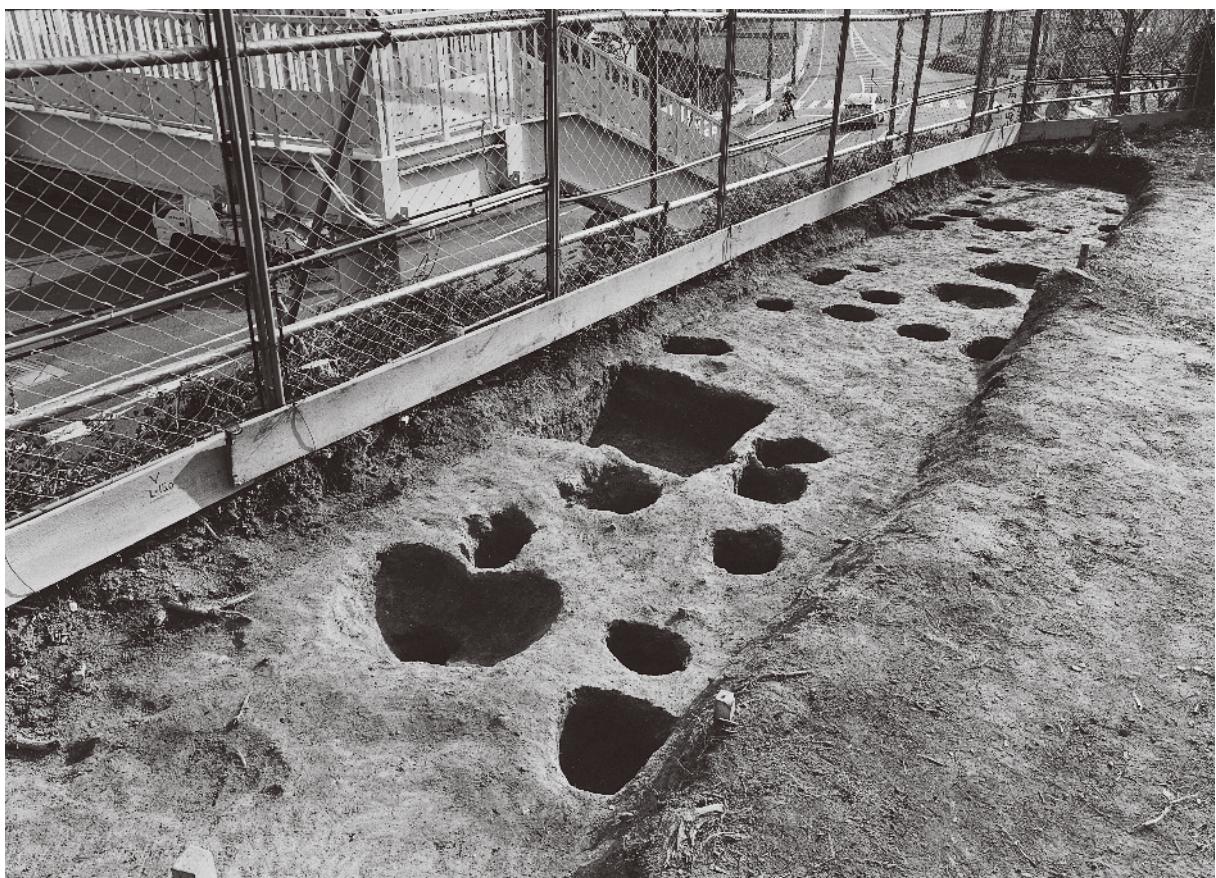


知波田小学校遺跡 調査区全景（北から）

図版3



1. 知波田小学校遺跡 調査区北部完掘状況（北西から）

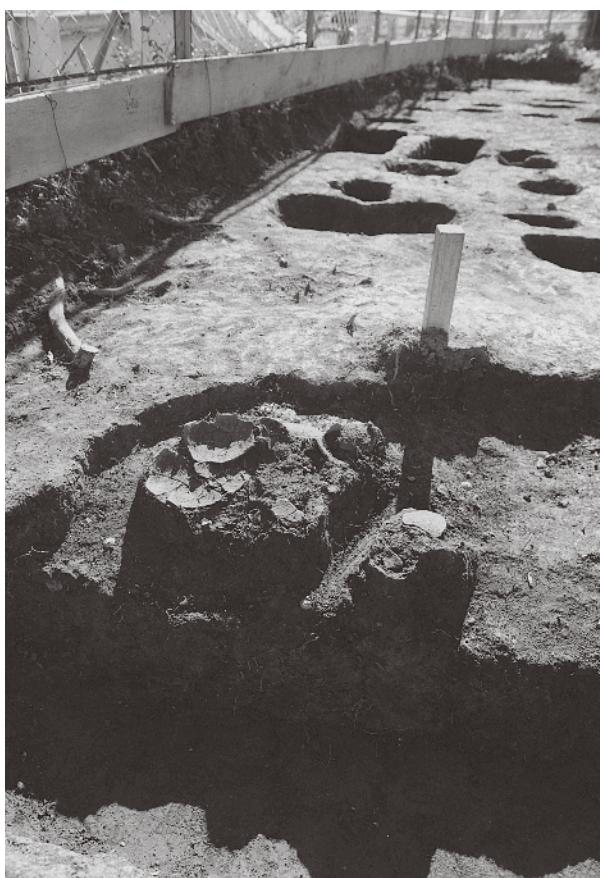


2. 知波田小学校遺跡 調査区南部完掘状況（北西から）

図版4



1.SH01 完掘状況（北西から）



2.SH01 遺物出土状況①(北西から)



3.SH01 遺物出土状況②(北から)

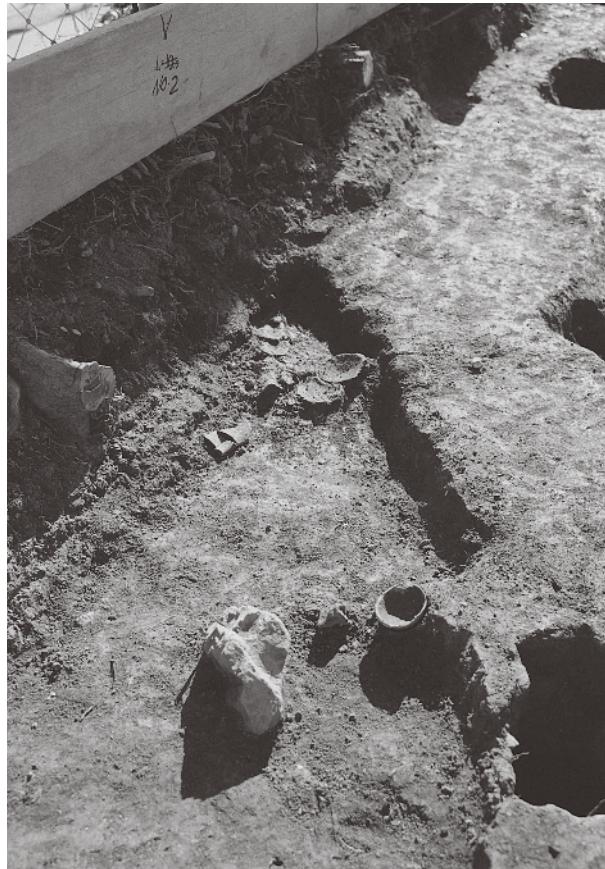
図版5



1.SH02 完掘状況（北西から）



2.SH02 遺物出土状況①(北西から)



3.SH02 遺物出土状況②(北西から)

図版6



1.SH04 完掘状況（北西から）



2.SH02 焼土出土状況（西から）



3.SH04 遺物出土状況（北西から）

図版7



1.SH03 完掘状況（北西から）



2.SH03 炉出土状況（西から）

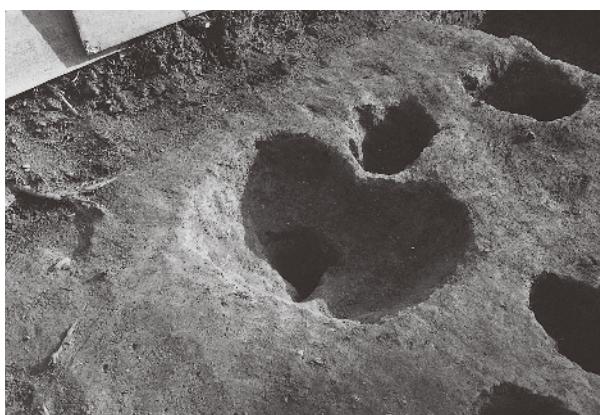


3.SK01 完掘状況（北西から）

図版8



1. 拡張区 完掘状況およびSH05 完掘状況（南東から）



2. SB01-P01 完掘状況（北西から）



3. SB02-P01 完掘状況（北西から）



4. SB02-P02 完掘状況（北西から）



5. SB03-P01 完掘状況（北西から）



1.SH01 出土 土師器（集合）

遺物番号は図版 15 の別図1参照



2.SH02・04 出土 土師器（集合）

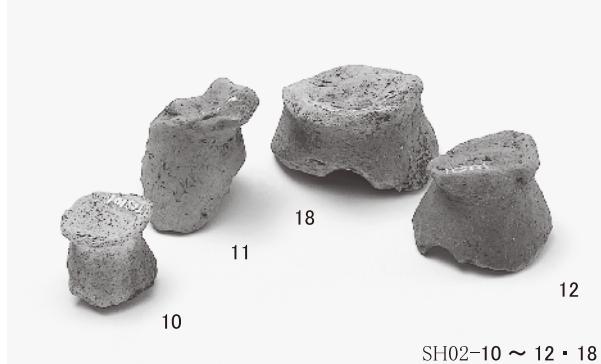
遺物番号は図版 15 の別図1参照

図版 10



SH01・03・04 出土 遺物

図版 11



SH02・04 出土 遺物

図版 12



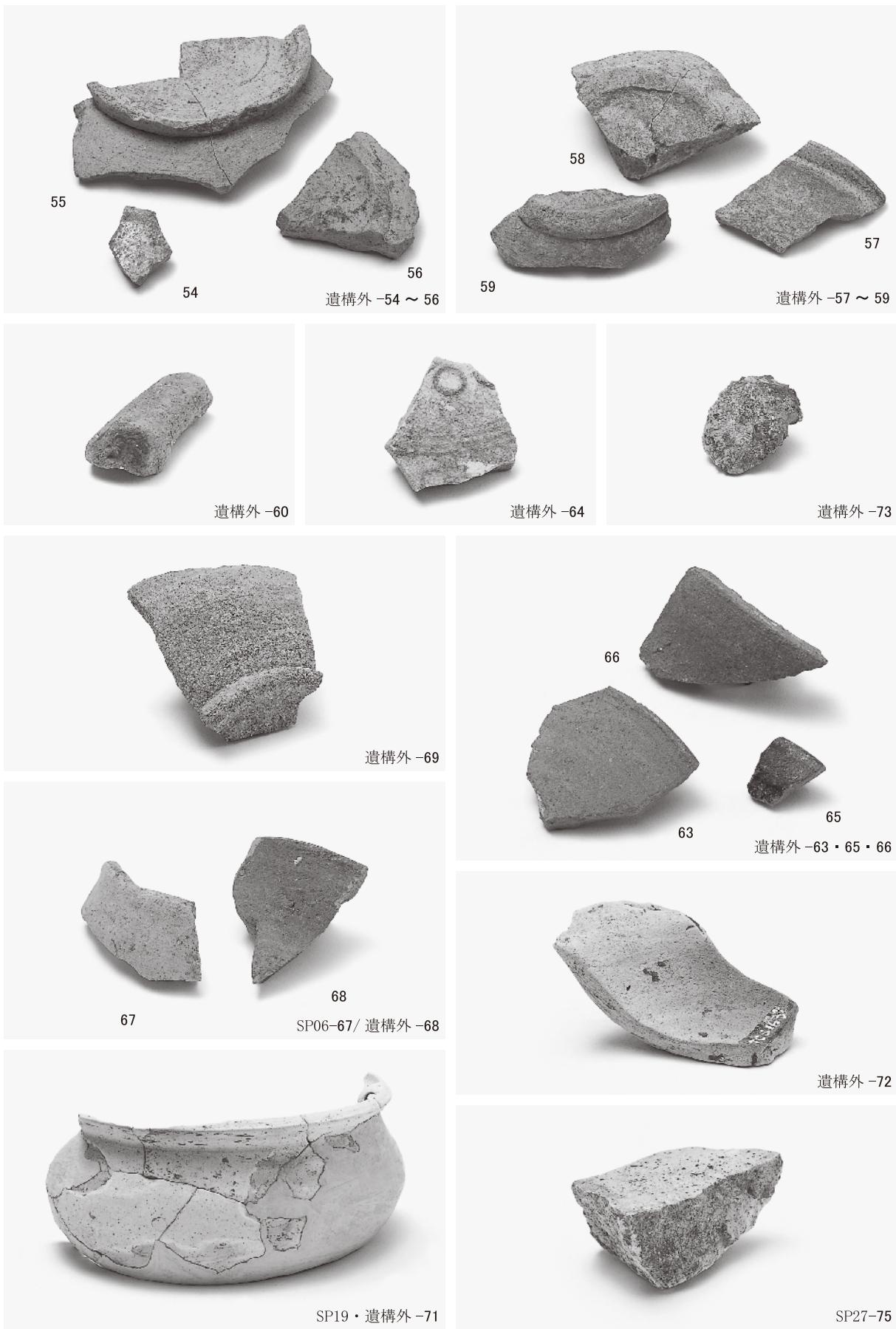
SK01 および遺構外出土 遺物①

図版 13



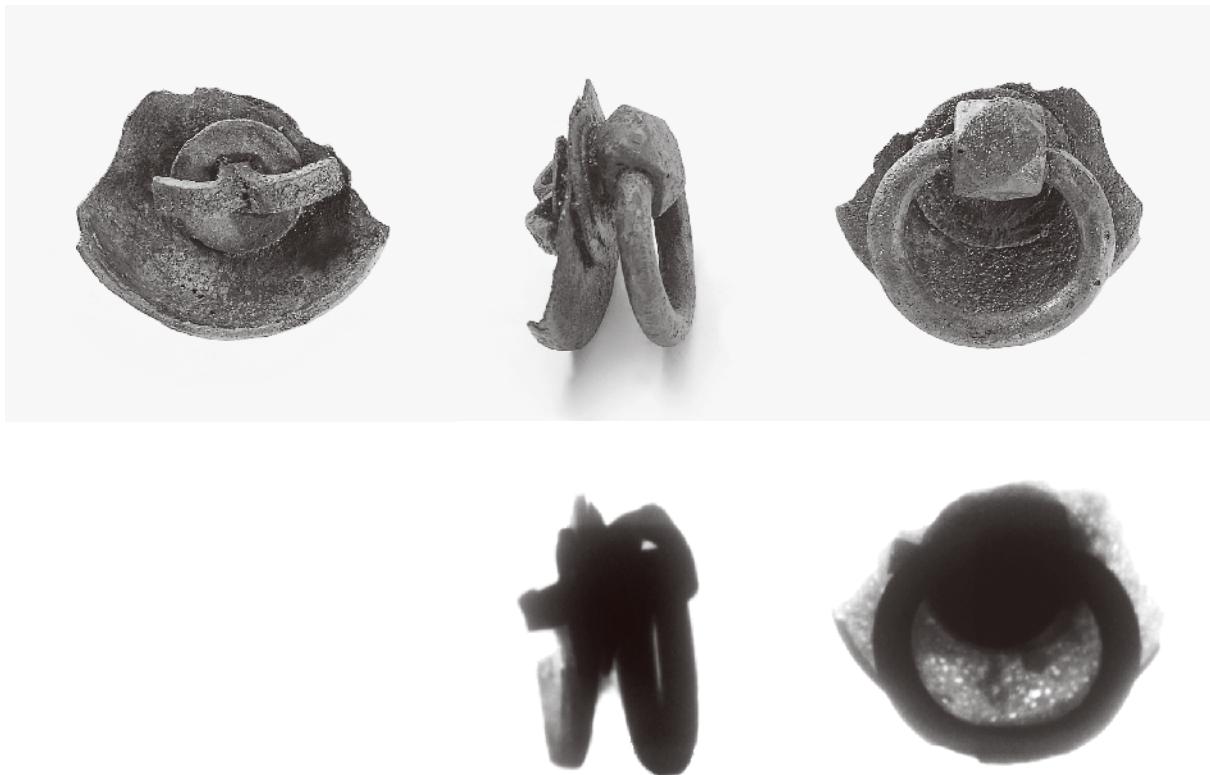
小穴および遺構外出土 遺物②

図版 14



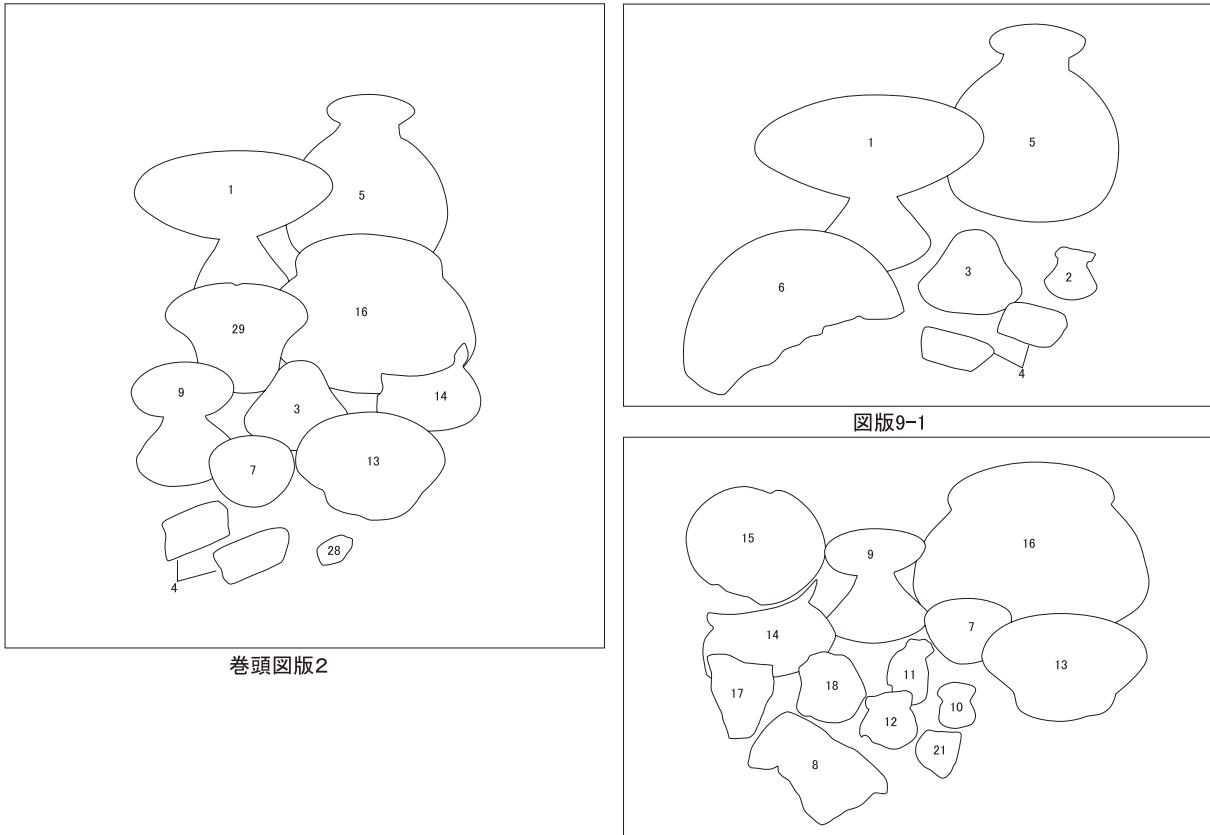
小穴および遺構外出土 遺物③

図版 15



SP26-76

小穴および遺構外出土 遺物④



別図1 卷頭図版2・図版9に掲載した遺物番号

報告書抄録

ふりがな	ちばたしょうがっこういせき
書名	知波田小学校遺跡
副書名	平成23・24年度(国)301号地域自主戦略交付金(交通安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第23集
編著者名	大谷宏治(編集・執筆) 池谷則秀(執筆) 中鉢賢治・溝口彰啓(編集)
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261(代)
発行年月日	2013年1月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 (世界測地系)		調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町	遺跡 番号	北緯	東經			
ちばた 知波田 しょうがっこう 小学校 遺跡	しづおかけんこさいしおおちば 静岡県湖西市大知波 あざ 字カン崎1184-1・ 1185-1の一部	22 221	7	34° 45' 29.0"	137° 30' 41.8"	2011 1017- 2011 1208	45 m ²	道路建設((国)301 号地域自主戦略交付 金(交通安全)事業 に伴う埋蔵文化財発 掘調査)
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
知波田 小学校 遺跡	集落	弥生 (末葉)～ 古墳(前期初頭)	竪穴建物5軒 以上・土坑・ 小穴	土師器	置石炉をもつ平面方形の竪穴建物。弥生時代末～古墳時代前期前半(3世紀後半～4世紀前半頃)に位置づけることができる。竪穴建物5軒が近接あるいは重複しており、少なくとも1回の建て替えが行われた。			
	散布地	奈良～ 平安	掘立柱建物?	須恵器・土師器・綠釉陶器・灰釉陶器	掘立柱建物がこの時期に位置づけられる可能性がある。知波田小学校遺跡南側の道路を登れば史跡大知波峠廃寺に行きつくことから、それとの関連が注目できる。			
		中世～ 近世	掘立柱建物? ・土坑・小穴	青白磁・青磁・山茶碗・渥美・常滑・瀬戸美濃・土師質土器(内耳鍋)・かわらけ・土製人形?・轔羽口・銅錢「咸平通寶」・銅製円環付金具	遺構は不明確であるが、貿易陶磁器をはじめ家具に用いられた可能性が高い円環付金具などが出土している。「カン寺」と呼ばれた向雲寺などとの関連が想定できる。			
要約	知波田小学校遺跡は、浜名湖西岸を通るルートと多米峠を越えて三河へと続くルートの交差点にあたり、海上交通、陸上交通の要衝に位置に所在する。 今回の調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物で構成される集落であることが確認できた。建て替えが確認できることから、少なくとも100年程度は集落として機能していた可能性が高い。 奈良時代以降の遺構については明確ではないが、掘立柱建物が数棟分確認できる。平安時代以降、大知波峠廃寺や向雲寺などが近在しており、これらの寺院と関係する遺跡であった可能性が高い。							

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第23集

知波田小学校遺跡

平成23・24年度(国)301号地域自主戦略交付金(交通安全)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年1月11日

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266
印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839(代)

